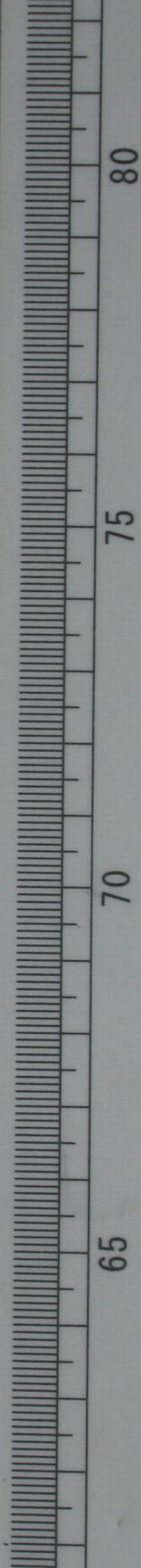




風雅辭聞
第十一号
至二十号

特別
48
415



琴亭

48
415

風雅新聞 第十一号

明治十年二月廿日發兌

梅花未開 (前号の續)

咲く梅の心や霜よりなれ 未初花の見え迄も有かき

風早公紀朝臣

鶴園久子

梅花いま開くべきけとひして今朝おもいろく露の結る

力石重遠

うぐひすの鳴りぬ限の梅花冬こもりて咲くとやする

松平親責

鶯のさめよと植ゑし梅花それさへ今の咲きがてよして

屋代柳漁

たゆたはは初鶯よかくれあんと梅花さきかけのせぬ

昭和37年10月29日
田中善造氏
贈

37 7896

山里やまの又また曆こよみととなる梅花うめのはなままぶみやここよもひらかざりけり

上州前橋 尾高々雅

年寒としさむき雪ゆきををおのれれといいたたいいきて老木おいきの梅うめのの花はなも急いそがず

佐渡飯岡 美野部棋

鶯うすの鳴なりぬ限かぎりいと加トかととや去歲こぞのまま、ある梅うめの下したひも

同小木港 廣橋庭世

去年こぞうけてふる木きの梅うめの白雪しろゆきも解とけああばとけん花はなの下した紐ひも

鈴木重嶺

立歸たちかへりりさも長閑のびやかある年としあるを何なにをうめととう咲さいととめぬ

○夜々よりに廻番まはりばんてふもの有あるを見て、高知縣 横田正綱

白波しろなみの夜よるののえづめとつく杖つゑの夢路ゆめぢをかねて安やすけかりかり覺けり

海邊霞

加藤千浪

貝拾かいひろふ海士あまの子こぞもも立交たちまり霞かすもはるの浦うらづづひひとる

諸葛亮

浣花翁

三みたび訪とふ人ひとの誠まことのなかりせば草廬くすのぼろはなれざらまま

或歌あるうた妓ひめの鏡かがみも覆おほふ袂紗たもとも歌書うたがきて

と乞こひけれれを

露園千秋

向むかふたたび猶なほも思おもひやます鏡身かがみみの行末ゆくそとのううつつままかかは

丙子歲晚感情

有無軒一口

雪ゆきどのみつもる齡よはひのままと鏡身かがみみさへふりゆく影かげの見みええ覺けり

曉鐘傷心

築地 武田金石

つつくくといいを寢ねうねつ、物思ものおもふ心こころもひひくく曉あけつぎのかかねね

○桃もも、櫻うづも、柳やなぎを隠かくして春はるの歌うた 岩手縣 千秋堂愛竹

折て来一藤ももゆる物ながさくらし松の火やなき

螢、蟬、蛸、を隠して夏の歌 右 千秋庵

玄ほる、蟹も濱かせみに染て納涼旁よ夜網ひくら

萩、葛、尾花を隠して秋の歌 全

大空はさよくそみたり此夜らの月よ物をばな思らん

全

降雪を玄ば一詠て樵夫らごもとの通ひちとり違へけり

傾城も自醜業たるを悔みて誠を泣き、鶏卵の人、滋

養の品たるを知て折詰の四角が通用よるしき開

明の御代の名よ負ふ三十日も月あきららうよして

提灯の弓も要なきこ、ちと 繪馬屋額祐

大としの闇の消たれて掛乞よ隠れん陰もなき月夜かち

人力車 葛飾 結城 光昭

神力の加護ある世も人力よ駕護の絶えたり車流行て

○二月五日即事 牛門 香月老人

風雪漲空飛欲狂、銀沙玉線白茫茫、誰言造化無違策、没得梅

花不没香

石田三成 堀玉縣 懶 叟

寵遇豊家與衆殊、爭甘末路改方途、決然一舉敵人頑、誰道石

郎非丈夫

姪蕩和尙 全 嵩 古香

連華漏滴氷沈薰、梵唄鄭歌取次聞、十二時中不遑暇、白毫禮

罷又紅裙

○見立古今競 琴 通 舍

去年とや言ん今年とや言ん

こはれる涙いまやとくらん

なけどもいま雪の降つ

うち出る浪やとるのはつ花

もの憂る音よりぐひその啼

袖ふりはへて人のゆくらん

今ひとしほの色まさりけり

○天變地異

(雷)其所へ行の地震先生ぢやない(地)コレハお久し震り貴

公の近頃音無い(雷)ナニ維新り僕の嫌を桑原が殖さか

ら鳴ても漫よ墮ねエのみの事ぶ先生の去月中横行よ出

かけたのいどら云譯(地)僕に又嫌な物が無くなつさうぶの

本郷 岡本 黛山

舊曆を捨かぬる人

免の字の後の拜の字

人力車夫

等級の進む學校生徒

頃日の權猫的

今より評判の勸業博覽會

訓官所の地所拜領

事(雷)ナニ嫌なものとの(地)ヤッパリ貴公の桑原と云ふ様な物

サ(雷)鳴程アハ、く鳴程アハ、(地)オイ解たかね(雷)それで解

やした、先生の嫌な、ソレ万歳樂がお廢止よ成たから

○松壽連月次發會興歌合

松壽翁先生判 兼題 門飾 一月、飲食

若水を汲みし庭井よ色青く輪よ組みたる門の輪かざり

武藏野の都とありて門松のつく街もはてなうりけり

争ひのあき世の春の門々のかざりの松も根のなうり梟

浪華 豊の門

名古屋 秋園 壽雄

初若菜雪間はつわかあゆまあさるけしき哉湯氣あかやけ霞あせめる七種ななくさのかゆ

松の内まつうちのとり、汁じゆをバ頓やぶて咲花さくはなもも欲ほしや風かぜのまトあひ

喰積くひづみの蓬よせぎが島しまの影かげうけて飲のむ屠蘇酒とそさけやかすみなるらん

はつ子はつこ日ひくひつみ臺たいの松まつうげに小殿原こどのらさへ見みゆる重詰ちゆうづめ

明日あしたたる軒のきの御旗みはたの初日影はつひかげとぞ、ぬ門かどの松まつののどけさ

開日當坐ひらひたうざ 松の内諸藝まつうちしよげいを催もよほ 筑波庵大人判つくはなあんおとなはん

箒はらきをもとふぬ朝あしたのいとひ酒さけをどるみぶりよ出る芥太夫かいたいふ

感吟かんぎん 全 松の舎華美まつのかくわみ

前夜來まよべきたる鬼おにも年始ねんしの酒機さかき嫌笑けんせう顔かほよをどる三面さんめんの所作しよさ

同 商家梅かうかばい 稻垣大人判いなぎのおとなはん

感吟かんぎん 岩上亭いわのうへてい

入目ひらめよよくつきよ鬼深おにふかき香かをどめ屋やの梅うめの色いろ白しろくして

全 玉纏居たまづむい

薄うすもの、霞あせぐくれよ薰かをる也なりきぬ屋やの庭にはの梅うめのいろく

(兼題當坐けんたうざの点者てんしや各二人軸かくににんじくの歌四首うたしよしゆあり次号つぎごうよゆづる)

記者曰きしやいふ第八號はちごう芭蕉ばせうの假字かりあの事ことよつきて思おもふしを陳のべたるう

ちに鼻はな聲こゑ入いる皇國語みくにごよなうりし証あかし尙後号かうごうよ言いんと記しるし

たるが爾後なんご餘あま白しろよ乏せむしく且かつ面白おもしろき事ことも非あらば黙もく止だしたるを如いか

何々なになにと促うながす、の寄書よせがみあり止やむを得えざればお邪魔じやまあが少せう

づ、つぎく、略そのよゝを開陳とべー

○五十音外んつ(即鼻聲、入聲)の辨

ん、口を開き、生ぜる鄙俚き音也、故、皇國五十音、列せす、古昔此音を用ふるの語、更、な、し、漸、々、け、む、(兼)ら、む、(藍)あむ(南)てむ(點)等の語尾、在るむを、口呼の便、まんと、訛、一、が、寝、古く、て、國語の如く、成るより、假、ま、ん、字の制、あるを、充たれども、此等、其原、む、ある事、決、し、い、で、其証を、陳、ん、譬、ば、あ、ら、む、の、活、用、あ、ら、ま、し、い、と、む、を、い、と、ま、く、等、と、云、ひ、あ、る、ら、む、と、云、を、こ、の、結、ぶ、あ、る、ら、め、等、と、活、用、け、る、ま、て、ど、に、著、明、け、れ、ど、な、は、近、き、譬、を、以、て、言、ん、佛、家、の、題、目、名、號、と、云、あ、る、南、無、妙、南、無、阿、彌、を、現、に、ナ、ン、ミ、ヤ、ウ、ナ、ン、マ、ミ、と、唱、る、等、自、然、音、便、の、同、例、よ、し、て、此、等、の、其、訛、呼、あ、る、事、の、解、を、俟、ま、し、て、瞭、然、な、ら、む、や、諸

此、音、よ、つ、き、て、先、哲、種、々、の、説、あ、り、或、ん、ま、行、の、轉、と、或、ん、な、行、の、轉、と、其、説、又、曰、く、に、字、の、畫、末、を、撥、て、ん、字、を、制、し、二、字、の、畫、末、を、撥、て、ん、と、せ、し、也、と、云、ひ、且、西、洋、よ、て、字、を、用、ふ、る、等、を、引、て、な、行、あ、る、の、証、と、し、又、ん、の、无、の、草、跡、或、ん、の、尾、を、撥、て、制、し、た、る、也、又、ん、の、无、の、首、を、擧、る、也、な、と、云、て、ま、行、な、る、は、証、と、し、る、あ、り、又、或、ん、の、梵、字、の、空、點、●、を、取、る、と、も、云、へ、り、假、令、文、字、の、孰、よ、り、取、る、も、せ、よ、此、音、如、何、様、と、味、と、ふ、と、も、ナ、ニ、ヌ、等、よ、り、生、ぜ、可、ら、む、別、よ、一、種、の、音、あ、る、事、熟、く、口、呼、し、試、み、て、自、覺、る、べ、し、

(以下次号)

○夢中神女ニ發句を與一話 三重縣 歸農社 遞送
今年歳且身三保の浦、在、て、積、雪、の、土、峯、を、仰、望、し、る、に、大、空、へ、一、の、銀、世、界、や、涌、出、し、と、恠、ま、れ、我、を、忘、て、停、立、折、柄、忽、然、窈

窈たる乙女傍に在りて何れをう想と答ふく地球濶と雖斯る
美景又やの有感せるの餘句と成もの我も有と則一片紙よ
記興るよ乙女數回打唵悦る面貌而亦忽然何方去りと
思バ夢の覺よけり是常又愛執せ一妄想の所爲よや其句曰
降よけり青き虚空も不二の雪
農士 墨江得水
鹹 齊

そさまトや雲と氷との二荒山 東 杵 庵

○狂句
人前よて放屁するの破廉耻の甚しきあれど如何せ
ん出物腫物所を嫌はず貴人とても放ざるを屁さ
るなり況て下民よおいてをや

萬民も屁を放る程よ世の豊饒 前島和橋

屁の本の穴へ歸らず鼻へいり 全

壁よ鼻あつたら透屁も出来ぬ 全

時あらずやかましかごの轡虫 會田皆具

一たんさんせと約いのまが詞検査させたり竿まで入 江戸川閑人

れん理といふ事樹よさへあると言てたふした主のうそ 琴通 舍

もひとつおまけよ 申樂亭不曲

れ。ん木放^ほ下^かして摺^{すり}ばちこどし夫婦^{ふうふ}げんくどで付^つる味^{あじ}そ。

世^よ帯^{おび}道具^{どうぐ} 前橋^{まへはし} 文^{ぶん} 器^き

貧^{ひん}乏^{ぱふ}世^よ帯^{おび}へおしり女^{にょ}房^{ぼう}どうせ長^{なが}もちやありやそまい
玄^{げん}やつ^つの手^てくだまや透^と間^まがさいよ胸^{むね}も卸^{おろ}でまめてある

題^{だい}をい 奈^な蚊^{ぶん}河^か喜^き市^し

いまのおまづの研^{けん}役^{やく}れうり下^げうを、えらんで棄^す奔^{ほん}羨^{せん}
正^{せい}誤^ご○前^{まへ}号^{ごう}五^ご丁^{てい}才^{さい}第^{だい}十^{じゅう}二^に号^{ごう}茶^{ちや}居^いの屋^{おく}の誤^ご、七^{しち}丁^{てい}第^{だい}二^に行^{ぎやう}種^{しゆ}々^{ささ}姿^{すがた}のの姿^{すがた}の轉^{てん}倒^{たう}也

廣^{くわう}告^{こく} 發^{はつ}會^{かい}書^{しよ}畫^が小^{せう}集^{じふ} 歌^か兼^{けん}題^{だい} 二月二十五日 八丁堀北島町一丁目四十八番地
於^お 宅^{たく} 居^い所^{しよ}茅^も筍^{たけのこ}町^{ちやう}石^{いし}新^{しん}道^{だう} 二^に峯^{ほう} 五^ご峯^{ほう} 高^{たか}
於^お 中^{ちゆう}村^{むら}樓^{ろう} 三月十八日 松^{しょう}の門^{かど} 三^{さん} 卯^{みづ}子^こ

風雅新聞第拾壹號

風雅新聞 第十二号 明治十年二月廿八日發兌

天^{てん}保^{ぽう}三^{さん}十^{じゅう}六^{ろく}番^{ばん}歌^か合^{がひ} (第^{だい}六^ご号^{ごう}の續^{つづ})

十三番 左 浦^{うら}時^{とき}島^{しま} 清^{せい}水^{すい}光^{こう}房^{ぼう}

月^{つき}落^おる 須^す磨^まの 筈^{はつ}屋^やの 明^{あけ}が たまあくや背^{うしろ}れ 山^{やま}はと、ぎす

旅^{たび}衣^{ころも}うらさびしうる夕^{ゆふ}ぐれまかたのまよひを吹^ふ嵐^{あらし}かち

右 羈^か中^{ちゆう}晚^{ばん}風^{ふう} 鈴^{すず}木^き重^{じゆう}嶺^{りやう}

十四番 左 書^{しよ} 前^{まへ}田^{でん}夏^か蔭^{いん}

どり見^みれば後^{のち}の鏡^{かがみ}とちるばかり世^よ々の姿^{すがた}ぞ書^かも移^{うつ}れる

右 鵜^う 尾^お高^{たか}々^々雅^{みや}

あなう世^よの心^{こころ}よもあらず人^{ひと}の爲^{ため}つながれて社^{しゃ}浮^{うき}沈^{しづ}すれ

戀^{こひ}帯^{おび} いはた帯^{おび}なよとか人^{ひと}も言^い解^とん下^{した}よむすぶの嬉^{うれ}かれども



油繪といふもれを見て

陸奥國人

下澤保彰

あぶらゝるれ鏡の中のおもかげの聲もやすると疑れぬる

吹上の御庭を拜見て

雲の上と聞つるうらゝと天河せきおとす氷の流とぞ見る

富士見の御亭まで

御園生の竹の林のすゑとはく泰と見ゆる不二の玄と山

吉良上野が十二月十五日も我得たり顔も雪を賞つ、酒飲

戯れたる圖も題す

消てゆく今霄ばうりの命とも知ふでやあだも雪を愛覽

記者曰此歌四句の徒も仇を兼たるう徒の濁音仇の清音をれども秀句の拘ふす

身の岸も在りて船出をおくれども心の君を離ざりけり

送友人

武田金石

いろはにの四字を上下の句れ沓冠もおきて

よめる 虎門 無有軒一口

いづり皆雁の立ち此日ごろはあゝの盛を待とせし間も

同くはへとち 蓬 室

ほの匂ふ雲を目的と猶いくへどほくや分ん花の山みち

松不改色を題よての玉詠追々諸方より寄せられたるがあまり敷多よしてことごとく

登録するを得又敢て取捨をべからず不得止して除き升からあしからそ御承引

○風雅を賣るの弊

日本橋

會田皆真

貴社新聞も預て見えたる古池の蛙飛入も何をかと思ひし

元來拙き筆西有は止南う將書んかと躊躇ふ事凡十八回

二九稀口と思者乍エ、任他と蛙の面へ氷唐許して餘白を

汚事との成ぬ抑風雅の道澤成中も文事も屬して殊も繁

茂る者ハ俳諧と名稱たる片歌成べし或ハ一個發句の点
取、或ハ鯉鱗行式の附合、若ハ浴樓煮茶家の撰額、若ハ神
閣の奉燈都下ハ勿論、僻陬山村、至處多少此道を愛翫する者
無ハ非也、然又近時一種の惡弊を生トたり何也曰風雅を賣
物よとる是也、いで其弊たるを開陳べし、世ハ宗匠とゆるさ
れし者の中ハ点取の謝義ハ姑措く連句ハ至バ三十六韻一
卷幾等と定ざれハ勤志、或ハ短冊ちと染筆を乞へバ、まづ
其價を定め、然後ハ請ハ應むるガ如きあり是所謂風雅を賣
ハ非して何也如斯ハ貧窶の者ハ自其道を廢棄ハ至べく豈
祖翁の意ハ背くハ非や素より貴賤貧富を撰志唯其道ハ志
そ風交雅馴を社眞の風雅と可謂馴と思ハ各位如何で五猿

○俳諧歌

上野

岩手縣

千秋堂愛竹

中々にあづまの比叡のひえハせで山路長閑き花ハ白雪
東京にハ日夜非違の警嚴重あるも民の戸さしハおこたれ
るよや夜ごとに五十戸内外盜賊入ぬと聞くガあやしさに
かゝる世もつきぬ眞砂を 淺草 浣花翁
石川や濱の眞砂の諺ハ實ハうらめしうなん翁のしりへに
よりそひておのれもひとつ 銀座通 杉園生
白波のよるハ五十戸を騒せて眞袖濡そと聞ガ慨たさ
○皮相開化 埼玉縣 春雲生
外面英豪丈夫列。内腸怯懦婦人行。恰同昔日公卿宅。巧假珠
簾蔽敗堂。

風雅新編 第十一卷

田重次

辱也非輕死也輕君亡臣辱豈聊生自家畜得三年艾灼起霸圖千歲榮。

全

欄本叟

春夜枕上

全

春桂情史

豆大殘燈殘焰燃香衾春暖夢纏綿情痴一片未灰盡魂蕩池塘新草邊。

春曉

全

古香山長

殘月影懸垂柳楊聯珠鶯語遍西廂夢邊顏色難留繫心繭吐絲空自長。

留洋學生

全

春雲生

鳳匹鸞儔奈各天一絲雷信夢空牽拆聲闌夜衾如鐵旅館寒燈獨不眠。

春鶯出谷

牛門外史

蕭條澗戶鎖松筠殘雪未消寒逼人不是遷喬傳一轉誰知世上已回春。

○点あへして同意を(前号狂歌の續)

繁樹

彈初も門よかざれる松がさね茶の湯坐敷に語る宇治節

全

秋

吉

郵便の端書をひさぐ店さき五りんむりも咲く梅花

全

松

壽翁

異國のふりも日本の習りも取交せかざる海老の長髭

全

屋

寸羅

數の子に豆よごまめに三組のさうづき取て祝ふ屠蘇酒

松壽連月次狂歌合

二月分

風雅新編 第十一卷

四

岩上亭大人判 兼題 名所雉子 寄日戀

子十三を思おもつ十まを慕したも大方おほの世よのさが野のとや雉き子の鳴かく覽らん

根ね芹せりつ十むあし十もとゆすり鳴かく雉き子こたつや霞かきの十きぬ笠かさの岡おか

忍しのぶ十三べき身みを八あ忘れわれそ狩かり人びとの入い野りのの十き十いと草くさ深ふかくとも

早さわ蕨わづの十こぶ十三ーや胸むねにか十きにけむ夢ゆめ野のの雉き子こ驚おどろきて十つ

世よをゆ八とる十三櫻さくら咲さぬとみよし野のに地震あか知し雉き子こや聲こゑを立た覽らん

又また寢ねとる夢ゆめの十うち十三よも朝あ日ひ影かげ勻はらへる妹いもぞおもかげ十よ立た

う十とれ行ゆく月つきの跡あと追おひて出いる日ひのをち歸かへつ、逢あ時ときもが十あ

水みづ無な月つきの照あ日ひの影かげ十よう十さ人ひとよ土つちさへ十さけて落およとぞ思おも

○五十音外ノツの辨（前号の續）

唯ただ此こ音ね本ほん然ぜん閉へい口こう音ねよ十して五ご韻いん中ちゆう孰じやくに屬ぞくとべき十の等とう位いあけ

れ十ども、マ行まハ先ま合あ唇しん一いっ倏しやく唇しんを分わつよ生しやうむる音ねよ十て就しゆ中ちゆうハ

ハ五ご韻いん中ちゆうの合あ口こう（第三だい位いウうッっスす等とう）に位いとるを以もて殊こと又また閉へい口こう

音ねよ十近く、又またハ譬へいハはちるらむなど咏えい吟ぎんせん十ムむと言いんんと

して先ま唇しんを合あせ閉へい口こうしたるま、よて鼻はな中ちゆう又また殘ざんる音ねなれれ心こゝろ

倭文纏

千種秋人

（以下次号）

(混)ト易し然ども之より生トたるに非一て別一一種の音
なり(自然)口呼の便とされる耳且マ行の音とまれナ行の音
とまれ(其他)の行の音とまれ(其)原音と拘とらず唯讀下
の便と任せて後より他音と訛呼ぶ之を名づけて音便とい
ふ(音便)の事別と言ふべし(後世)漸多かれ古語に更な
かりしなり或人曰く本國にも上古よりンといふ音の下
つく語に有しかれども當時ン等文字の制なく且之も當
べき漢字もあき故又万葉等武音の漢字を借りて書け
るも有る耳とは是今常言慣聞慣たるよりの僻心得あり如
何とされを万葉集の借字に險濫南點等と書るハ仍けんら
んかんてん等と讀むべしと思んが然らば必けむなむ等
と讀べきあり或ハ將來を今金將寢を念將歎を歎敢將令知

を知三等とも書き或ハ空蟬を爵膽と書き地名に印南野等
もある此等の字ハ咸韻鏡三十八轉より四十一轉までに納
たる唇内音(臻山)等の音と異なる味とふべし(の)字とて漢音
の韻ハ吳音の韻ニと唱ふべき定也もし彼印南野をい
かんのとし爵膽(空蟬)をうつせんと讀ハ如何斯ても或人ハ
仍可也とするか (以下次号)

○俳句
船へ行く都合よ潜る柳かあ 前橋 文器
落着のよい雨見ゆる木芽哉 素學堂

愛國の意を人のとひければ
愛國の造化の神の力らよて
月の本爲山

○狂句

徴兵のお役も辰巳の譽れ 茅場町 賛々亭小三

華土族の剣を廢て自主の權 全 全

箱入も樟腦とるさハ虫が付 全 黛 山

おのれ坐布圍宿六を尻に敷 雲

陰事を吹いいらざる口へ風

○壁も有耳

培玉 花寄園子

そろく／＼／＼／＼／＼／＼急進黨 見つそぢれつたいヨ漸進黨

大きなものだねエ 印税 見てないやだヨ 屠牛

まゝ出したチ 類焼施金だれにもさせないヨ 禁刀令

ままりがい、ヨ 巡査 もうおやりヨ 未就學兒

奥の方から出て来るヨ 名馬 初手程の出かい 摘茶二番芽

またするのにかエ 檢地 じたしか上よあるヨ 試檢生徒

貴社新聞至極面白く唯恨らくは毎月二次の發兌その度數の甚多からざるを今少し号數を増さば尙一層盛大を加ふべしと思ひ依て聊姿心を陳ぶ 虎門 有無軒一口
○貴社新聞月次の狂歌が余りはいをとり過るやうだと云ふ人があるか忠告しませ
つとどらうの雜誌類より餘程正味が澤山あるからおまけだと思へばよいもの、モウち
記者曰本編刊行に僅々十數号江湖風雅の君の庇陰よつていと思ひ外の繁
榮世に有難き事に存ト升さて此二通の寄書の如き孰れも弊社愛顧の厚意深く感謝
奉り升發兌の度數を増んと固より企望の事なご今暫く手揃ひに在るを期と狂
歌の月に一回の催あるが去年來の分これまで毎号に追記せしより自然はハをゆづ
りいなれども最早おくれればせも少く且此上号數を増とに至れば定式月次撰の外
にも尤興あるものを撰入をべし右お答かたぐ尙ひろく諸彦の愛顧をねがひ升

○どいいつ

いろは沓冠 (前号の續) 琴通舎

つき日はいやと驚さへあくをいうに春とてこのあさね

なまけちや否だよ勉強さんせ、そゑをだいとと思ふから

むつとして歸ると見せたハ 氣を引くてくだこれで見えたらう

もひとつおまけ

不曲

ひ學で居ながら博識ぶつてまやべる書生のきいたふう

見立六歌仙

小さん

喜撰こそつてよむ新聞紙康む秀さへまぢかねる

業も平けりや智識もひらけ道もひらける小町幅

遍照金剛いふのぢやあいが黒うとるのも主のため

正誤○前号二丁ウ第二行千秋庵の堂同七行とり違へのちのた四丁オ庭のわは六丁
ウ第一行傍のわは同第二行我のたのれ同第十一行貴人のはに七丁ウ第六行棄奔
羨のはにの誤也こ、に追正と

○廣告

詩歌連俳琴碁書畫小集

三月十八日 於中村樓上

會主 松の門三艸子

風雅新聞第十二号

風雅新聞第十三号 明治十年三月十日發兌

○

葛飾

結城光昭

往し年函嶺に浴せしをり堂が島の夢想國師に詣けるに側
に國師並京極黃門公の歌を彫付たる石あり此石中央より
割れて叢に埋れたりき其後如何なりつらんと追想せらる
に今記憶のまゝを記して贈る

夢想國師

世中をいとふともなき住ひにてなかく安き山賤の庵

京極黃門

玄のべ人いそほの昔の跡とめて其古言に添ふる言の葉

右光

昭

玄のぶれと更ま何をか岩根はふ昔のみどりの淺き心よ

浦春月

竹芝のうらの夕東風えづまりて霞む沙瀬も出る月かな

題えらす 高知 横田正綱

まださより亂る、花を櫻島まことの春も見んよしも哉

曙霞 鶴園久子

村がらす梢はなる、山ぎはのすこしあかりて立霞かな

物名 一たばこばむ 全

よし親も立まさるとも大かたのこほむる計聞憎きなし

記者曰盆字の韻の所謂十行なれば聊口惜けれど歌がらのいと宜しく物名を

よくいひとられたる打すてがたくて 蘿の屋松磨

をりよふれたる 官舎の外面の梅のさきよけり昨日の雪も埋たりしを

かへし

今朝咲しどのもれ梅のよべ降りし雪れ色をや奪ひ満覽

餘寒 埜玉 石田秋景

一日二日霞むと見しを更も又風もかへして冴る空かな

○六翼車

牛門外史

阿濃津も泊りて、明日のかならむ大神宮も参拜してんど、雷

より車課せて、さて早起て、そこを立出んとて

記者因曰此文て文字多く重りたるが、省きなんの中々

よとるし、土佐日記も「縣の四五年果て、例の事等皆爲終

て、解由等取て、住館より出て、必可有處も多も不厭也

第一雞聲第二鴉、第三曉雀噪、管牙笑吾不似平生、緩投箸超

乗六翼車と云たるを、具したる者、この人力車もて社あれ

と言ふ、然、人力の即竹也、竹の六翼の反音、勸あれば借も名付

風雨... 第十一號

し也と言つ、路を急せて期の如く、大廟又詣でぬ

羨辦

培玉

懶

叟

見賢思齊者羨之可者也。羨人之富貴利達者羨之不可者也。盡其道而貧賤則貧賤亦何可厭哉。不由其道而富貴則富貴亦何足欲哉。庸人棄其可者而從其不可者。惑之甚也。語曰。舳舻相羨焉。知無我所羨於彼而彼亦有所羨於我也。

加藤清正

全

作意天公奪此公。托孤寄命意成空。佗年不恠豪城潰。柱石已亡長鬣翁。

于錄轍軻

全

春雲生

欲攫青雲引。力微空嗟伯樂世。間稀地行天狗無奇術。只賴一條雷信機。
(前号留洋學生ノ詩再考轉句拆聲ヲ改テ確窓トナスト云)

總北舟中

齋藤滴水

借步布帆。東都東。浮飄浪泊。任春風。海晴千葉寒。川浦十里波。程一睡中。

○月次狂歌合前号の續

落卷

竹

芝

六月の頭衝眞日。もいとさすよすいしき風の便り待身。

全

玉

纏居

仰見る日さへ恨し我。よのみ袖のひるまの無よと思へば

全

安

久樂

さけんとしてさける椿のつらくよこせ野の御狩雉や思し

全

康

樂

おちぬ君を慕ふ心のくさくさをやよ日の鼠はみて吳檜

三

開日當坐題 藝妓の稻荷詣 稻垣大人判

竹司馬

いなり山いなまのあらで唄女の客とまゐるも此目語り

平野屋玉助

赤髭とともよ海老屋よ立寄て王子いなりへ參る唄ひ女

同前 題 娼妓の襟見 多麻園大人判

まづまき

大御代を仰ぎながらもあなうめの花の検査よ出る遊女

松風舎琴也

汝が年の寄るをも耻よ咲梅の盛すぎ田とかこつ戯れ女

秋吉

稻荷やまゆふ風さむく鼻紙の小杉かざしてかへる唄女

意波美

うかどめの人よも見世の寫真より袖よ移して愛る梅香

當坐餘興 題 餘寒氷 秋の本月丸撰

玉纏居

青柳の糸とく風もさえかへり春の淺瀬のなほ氷りけり

松壽翁

春來てもさむさよどみて飛鳥川淵も氷を瀬とぞ變れる

稻垣

鶯のなみどの氷とけりねてまぶ聲たてぬはるの山がは

編者曰く此歌鶯の聲の立てと雖山川の氷、そこの心

いとよく汲れて侍り只いづこを狂歌といふよりあ

らんと聊疑のとけかぬのみ

谷川よとづる氷のくづけぬ

琴の屋調

残る寒さのとちふたぎけん

撰者 月丸

夜の夢のむすび兼けり厚氷

はるの川風さえまさりつゝ

○江南ニ探レ梅ヲ

福芝齊燕壤

誰か言ふ春色東より至ると、露暖よして南枝始めて開くと
営三品の佳作なり宜也哉早花を索めんと欲せば南方よ
若き鶯宿梅の孤株も魁笑の愛敬を翻して根曳の勅命を蒙
り大度嶺の万樹と雖黙々然として不興なれば箒を引く人
稀なるべし、余去る日龜戸なる臥龍先生を訪ひしよ東南の
風未發せせ高床よ睡るが如し、余原より蜀帝の寛大なる徳
を具せざれば、彼三顧の信を盡す事能はせ、更望を轉トて

南浦よ雷名の英兄よ知偶せんと四輪車なふで鐵路の連車
よ飛乗り蒲田の里よ趣きしよ果して白玉の装ひ嬋娟と綻
び清馨馥郁たり、茲よ日頃の素志を遂て携へたる一瓢を傾
け愈快の酔よ乗トて漫よ一枝を害ねんとせしが忽違式の
罰金を畏れ况て十指の欠ん事を厭ひて竟よ手を空く歸ぬ

編者伊平

爰よ一章の玉句もあきない遺憾し、今此君の戦栗せられ
し意中を察て補つ 枝折れば香の追て來る野梅うあ

○俳句

今聞し道とそれけり雉子の聲
遊ぶ日はほころびぐちや梅花
若艸や人のこゝろの野よ移る

神田 長 瀬

全 東家柳塘

全

香配りや梅のまづかよ夕作る
梅さくど来てまうしけり文使
氷うくみづ田のぞくや松の鷺

淺艸 橋 塘
七十四叟 月之本爲山

前号草稿は月之本宗匠の玉句を編次の際はし書を記しかけて外事は紛れ愛國の精神たる肝心の發句を書おとしたるが丁度十七字なりければ倉卒句のやうな清書したる儘摺立ふかりければ今改めて全文を左に掲げこゝに其鹿相を謝す

愛國の造化の神の力よて、
人の更也虫類に至るまで

新田のひらけましたと啼く蛙

○狂句

墨を摺るやうな黒の坊船を漕
長ッ尻此家の時辰のちと早い
全 雪 丸
バタ 安氣雄

ふくれての堪忍袋にのならず
親へその氣がねして見よ居候
下女囃今日狂句の會だらう
飯の蠅追へども盡ぬ杓子づら
親達もラリルンロよの舌を捲
全 雪 竹 贊々亭小三
近 賀 舍 窓

○五十音外ソツの辨前号の續

さて又同集に黄土粉不飽君今宵彈湯鞍干葦邊波此他敏寒
散難丹苑牽等同例も用ひしあり此等の字の咸韻鏡十七轉
より二十四轉までの中よ納めたる舌内音(深咸等の音と異
なる亦味とふべし)の字にて漢音の韻の又吳音の韻のニと
書べき例也若彼不飽君をわかなくんと讀み葦邊波をわし
へん等と寫したふんよの是亦何の事とも聞とくべから

ず(信濃、因幡、讚岐、等も同音の字ナ。行の韻なる証)邊粉等と讀
べきなる事判然明瞭ならずや、古昔漢字を借用ひたる嚴密
なる事斯の如し(或人蘭をラニと書く、ことさらに和けて
穩み云へる也と云へる、如何ぞや是亦臻山ニ屬するナ。行
の韻の字にて、牡丹、短冊、等も同くニと云が即正音なるもの
をや、さて臻山の音の字ナ。行の韻又深威の音の字ナ。行
の韻とだに心得れぬよき也)又平假字にても古今集の物名
ヲ牽午子をうちつけよと、しとや、紫苑を來しをよほひぞ、木
丹をあくたに等と詠るも亦、牽苑、丹、等と讀べき確証とすべ
し或龍膽をとりうたむと詠める此膽字の彼深威ニ屬す
る、韻にして則うたむと書べきなる事亦著明し、然を此等
の區別を知らず、偶字音の物名、を詞に隠し或、折句、沓冠、等

又なして歌詠んとする時なと漫々彼臻山音の字の韻をも
むよ移して譬へばるむ(論語)よりむ(五倫)等の如く詠み且
書ん甚トき非ことなり、但今の國語ニ就て古昔鼻聲のなり
りし事を明示す耳その他又於て此等の字音を今ニとよみ
且書んも坊なし、而して又、相通用するありせざるあり、
譬へば何曾をナンツ件をクダン等と音便に書くべし、而
してナムツクダム等との書べうらさる也さて西洋にて數
音合して語をなすの國語ニ似たりと雖其語の出生の意格
別なれば彼が轉の例を以て我國音を論ずべきよ非ず
○東都逸
うぬばれの止り處がちと高過て
ふられてあき出す雨蛙
きく子

(以下次號)

(いろは沓冠前号のついき)

ひたり立たり氣もおちつかぬ

籟生

たぐゆうしいぞエ學びのまよ

こゑも長閑よよび書トやく

琴通舎

やがてふうふと弾くせてうたひ

逢室

今暫時人目をえのびごま

正誤○前号二丁才第十一行エ、ハエ、四丁才第三行回春ハ回春七丁第二行姿心ハ婆心同十一行かたぐいのかたぐいの誤なり依て爰又追正す

○廣告

詩歌連琴俳基書畫小集

三月十八日 於中村樓上

會主 松の門三卿子

風雅新聞第十三號

風雅新聞 第十四號 明治十年三月廿日發兌

○電信

龜戸 中村一能

一筋の糸よりかけてあやしくも千里の外又交を言れ葉

風船

早川路香

風よのる船を造りて空の海も人の行くふ道ひらけり

開化述懐

大垣 平松良知

くれ竹れ世の景狀異ふ成果て昔も似たる一ふしもあ

舊習一洗

砂川雄健

世とともに面がとりせり開け行都の手ぶり鄙れ習ひし

郵便

翠

皆人のよりてぞ頼むうさ糸のかさ田舎も通ふ便りを

洋教

佐渡 金田知明

親を措きて隣れをぢな尊みそいりよ教のさくみ也とも

獨坐

蘿の屋松磨

王氷のおとも終日静みてあは雪れうへに小雨ふるなり

閑夜

牛門外史

あつらへし物ならさくよ梅香をそこはうとなく送る春風

隣家梅

加藤千浪

どにかくよ心合ぬ隣ぶよなほうとまれぬ梅香ぞそる

全

横山由清

おもほえず隣をかへて嬉しき植ぬも薫るよその梅香

道若艸

黒河真頼

つくふぬも鳥羽の繩手れつくり道つくる言よ萌る若艸

全

松平親貴

のる駒れ手網ゆるめて路邊の草はますべく成にける哉

行路春雨

鶴園久子

墨田川かすみを酌て歸るさ雨にぬれても急がざり鬼

故郷春月

逸堂

ふる郷を去のふ涙のかうらす斯許月も霞まざらまし

清少納言

とみ子

おも白く世に残りけり捲あげし簾の外山の雪のふる言

心

屋代柳漁

中々にひと心のなくもがなさらば身も世も恨ざら猿

○信向自由

埼玉春雲生

道聴塗説味虚靈信向自由輕似萍晝夕猫兒眼睛變南無阿彌妙蓮經。

四民同權

全

賢愚凡聖均人子。巧拙各宜真理然。衡也誠懸欺不得。農工商士一般權。

春日經菅都

全

古香樵者

麥秀漸分滋賀風。雲鷄空自叫蒼穹。湖田行灑追懷淚。老樹何邊古帝宮。

春夜小集

全

半庭春月數枝梅。有約良霄門扇開。筆硯團欒無主客。一三四五可人來。

春窓夜雨

牛門外史

蕭々春雨掩茅廬。靜夜無人訪獨居。笑我壯心猶未老。青燈挑起讀兵書。

○狂歌

出目作

開けざるお國心う検査する醫者そふ謀叛起さるる世よ

薩並や肥後の湊のあれよし舊弊がらの山猿等うち

記者曰此歌叛罪集よ詠人知すと有れども名よおふ
薩摩守の歌ある事明白也出目先生ふと暗號せし者う

出代

千秋堂愛竹

紅紛鏡醬をつけ来る燕ないて行雁や空よも春の出代り

歸鴈

全

二文字(こ)直ち文(し)へと春の鴈牛角字(い)ゆがみ字(く)なり

在京して

千葉

赤面亭綾丸

洗濯よ石鹼をつかふ東京もまだ舊弊のあらひつくさず

五十音字の折句

松壽翁

あけぬ 逆いそぐから 艦よう 飼男のえ物多どおして所知
うま 持てきこり 等集ふくぬぎ 原けふも 薪をこるよど 有覽
さ 苗取しづの 處女等そそよりも せくや 氷田よ 袖濡し 泉

○一 中節 淺間の書拔

琴のや調

まぶ 其くせが ガンコ士族 泣て 見せるを

鼻下の長髭

謠うて 見たり 耶蘇の門弟 ひちで 返事を

かゝ氣の猫

十チよ一ツモ 僕等が 投書 松いゝろこき

風雅新聞の盛大

○俳句

小築庵春湖

鮒鱧時とどころよよるものう

梅子

桃咲や 犬の出這入るくづれ垣

東家柳塘

道芝の青きよ 倦めば 胡蝶うさ

賊談平和を旨とする 俳偕も亦教導よて

七十四叟 月の本爲山

鳥畑けうてと 件の天氣かな

全

巢翻をいとふ 餌飼やうごれ鳥

全

戦地の人民を思ひやりて

全

子を持たぬ 里人のなし 桃の花

全

土ふみよ 畑へ下りし 巢立鳥

全

法華經の父少而子老と云 文意を

滴 水

○笑語

無茶陳人

無學山無文寺の 大和尚の許へ 一俗士 參て 質疑して 曰禪語

録よ 水邊尊者 隠頭脚と云語が あり 升がアレ何を云た者

でせう、和尚一向と 向とからず 赧顔を して 笑止千万を 形容なり

侍坐の雛僧小伶俐あるがさまりうね、和尚の耳も口をよせ
 ヲレハ阿師の大おそきな物の隠語でござりまそと低く告
 けれ心和尚喜んで糜尾をとり一拂して答て曰く、水邊尊者
 隠頭脚といふ未亡婆子の事を隠語云つたものである喝
 記者此原字の物語を童蒙の爲田舎諺辭摸して曰ん「或
 無筆の親父は小學校へ通ふ小兒が酒字を書て見せ家尊
 此ハ何と云字父首を傾げ黙然る是ハお前の一寸アハ
 好物の字ぶよと云とコレサ其様を淫醜な字を書く者ぢ
 やアチエと叱たど」水邊尊者隠頭脚といハ亦酒と云字の謎
 で其義ハ水邊ハシ也又尊者の尊字ハ頭(ソ)と脚(寸)とを隠
 れハ酉字と成る即シ又日次の酉ぶり酒と云字なる
 ○狂句風の俳句

盗まるゝ花や硯も貸きた上
 出代ていふや表へ出せぬ譯

江戸川閑人

○俳句風の狂句
 今日も又年の寄日か花は風
 遺失物もとの儘あり揚雲雀

柳道雄

○狂句
 力の勢終は駕籠をまいつけ
 一を打ち万戸箸とる時号炮
 学校の光り薬罐がへこまされ
 御倫言五厘減めて世ハ豊
 離魂病母の苦勞も二人まへ
 残念皿まなし骨湯迄吸ハ鯛

千秋堂
 眞中
 松壽翁
 賛々亭
 吐香
 柳志

磨汚し金札でさへ嫌がられ
曲の訴訟界紙への書よくし
鳥渡お断申ます近ごろ狂歌や狂句は芋の透漉だの最
期のお鳴雷ごのと、發炮りり武威々々鄙俚寄せられ升
ガ、牛鳴臭々島巢虚、お氣の毒あぐら、没書は痛升、屁も少
馬鹿利嗅繕履たら息な物革尻ませんが

○五十音外ノツの辨の續き
ツの緊促よして甲音より乙音よ移ふんとする間は在り漢
土よて此を入聲と云、蓋甲より乙へ移ふんとするの際暫く
乙音を控れば此音直又喉中よ入らんとする氣味あるより
然名稱たる也而して特一音をあす事能はず是殊又賤しき
音あり、故我國上古の勿論中古まで此音を用ふるの語さ

らみく無りしを以て之は當べき文字の製もあかりし也
然るよ漸々漢籍字音讀誦の僻かし移りて自然國語をさへ
入聲よ(警)バ云へバをいッば、あはれをあッばれ或は鳥取、堀
田、新田、新堀等と云ふが如き此他枚擧よ違ふす(訛呼する多
きよ)至りしより筆記よ臨み設又ツ字(ツマ)のツよ縁固
か)を用ひ既已よ數百年の久きを經より、さて此音を受るの
音の五十音中只カサ(但此行の聡と受す)タの三行よ限り(其
余の半濁音バビプペボ而己、警)バ等の如き)其他の音の悉く
連續するを得ず、豈狭くして窮屈の音なふとせんや(尙音
便例の條よいふべし)且此ノツ兩個の音の外諸の濁音と唱
ふる者も亦五十音外よて元來純粹の音あらざれば、國語の
始此音を用ふる、をさく、あかりしより後世よ至るまで自

亦文字の製せいかく假かりよ。等の加か點てんを以て目標めくとあしさる也、偶語たまの中下ちゆうよある者ものの或あるの語意ごいの區別くべつを立たつたるよ起おこり或あるの兩事りやうじを連れん續ぞくする語ごのつつがひ或あるの音おんを略りやくしたる時とき或あるの漸ぜん々々讀よ下くだしの便たりたりたる等らうも限かぎり皆みな各おの個ひとも事こと故ゆゑ原もと由よしあり故ゆゑ々々讀よ下くだしの便たりたりたる等らうも限かぎり皆みな各おの個ひとも事こと故ゆゑ原もと由よしあり故ゆゑ々々此濁音このじやくおんを頭かみよ置おける者ものの古ふる來らい千言せんげん万語まんご中ちゆう只ただの一言いちげん一語いちごもなきなきかん明証めいしやうよして一地球いちちゆうきう上じやう他たも例れいなく最々さいさい奇々きき妙々めうめう事ことよど有ありける、殊ことも半濁音はんじやくおんを稱せうふるパピプペボの假令語たごひの中下ちゆうよりとも是亦我皇國これまたわがみくにも限かぎり一音いちおんをだま交まへたるさき其音そのおん殊こと更さらも賤いやしけれた也、五十音中ごじゅうおんちゆうの音おんよてとララリリル等らうの鳩舌たうじやうよして賤いやしき音おんを中下ちゆうよ働はたらくのみよして是亦語首これまたごしらよの用もちふる事ことをし

○端唄 百々一

(以下次号)

三下り
「我戀わがこひの春はるの闇夜やみよの梅花うめはな忍しのぶとすれど 賴たの生ま

うつり香かの袖そでよあやなく立たつらき名な
過日友人こつじつじんと遊園あそびよ逍遙せうやうせしをり我わが

ト、一
「心こころをかけても傍そばへの行ゆけぬぬ冷艶れいえん全欺ぜんき雪ゆき 贊たの々々亭てい

全
「香かの睡言すいげんツツイ手枕たまくらの春眼不覺ふかく曉あかつき 交更舍かうかい鹹齋かんさい

全
「おもひおもひひそめての色よいへんと 吹ふ 萬ま

さめさめめのせぬかどわんとられ
處々ところどころ聞き啼な鳥とり夢ゆめよ餘波あまなみの袖そでの露つゆ

全
「げげこのかんしやく腹はらふくらして、お茶ちやを獨酌どじやくで餅もちを食くふ
蓬よもぎ 室むろ

思績商法

日本橋 會田 皆真

全 「斯うもまたらど 思案ままわん、まわんまつくし又まわん

漢語入

本郷 黛 山

全 「感冒をひかせちやあらぬの注意君ゆゑ徹夜も厭やせぬ
全 「診察うけうが服薬せうが添えよや快氣のおぼつかぬ

○正誤

前号七丁第二行五倫の五倫、同第五行坊の妨の誤同丁ウ第
七行東都逸今暫時の、の愆よてもすこしなり

○廣告

五十初度壽筵

四月八日於東 會主 居所猿樂町二丁目一番地
兩國中村樓上 隣中田常

本日詩文書畫歌俳諸先生臨席揮毫其他諸技藝雅俗を撰ばず
餘興長歌八犬傳大序結城戰爭の段岡安芳村松島吉住等合奏
風雅新聞第十四号

風雅新聞 第十五號 明治十年三月三十日發兌

○柿本神前より侍て見花忍音と云事を 鈴木重嶺

みよし野の吉野山の岩ばしる瀧の都よ言葉の花勻とし
ま、君をこそ聖と稱へ、君を社神との齋へ、年のとよ野行山
往、思ふどち花見る時のおもふ事うたひあげつ、一向よ
君まし、世を忍びつるかも

おかト題よて 三條西李知郷

いよーへれ春こそいとく忍ぶるれ我も老木の花よ向て

これも 風早公紀朝臣

さくふ花よほふ吉野の故郷よむらし忍びて濡そ袖かな

小學校 佐渡 塚原幹丸

淺香山難波津こえて外國の道もふみ見ん足もどぞこれ

蒸氣船

全

古城俊平

ふく風をたのまき走る船見てぞたくみし人の力知る

開拓

越後

山田眞幸

荒野らも田畑とありて木芽つみ苗とりくみ民ぞ賑ふ

男女同權

大平談

諸聲よわし告あは庭つ鳥雌雄の姿の名のみならまし

美人雪行

加藤千浪

窈窕娘が吹雪よりさを取られと争ふ姿もゆう雁鳧

裁梅

従四位

井上正直

何處より運ぶなるふん荷車も土もこぼれてよぼふ梅香

梅枝よ添へて人の許よ遣りける

石田秋景

吹風も厭ひて折し宿の梅徒よなみそひともし散やせん

偶成

葛飾

結城光昭

心せよ梅が香おくる春の風さのみし吹を花もこそちられ

渡春雨

淺草

大畑弘國

舟町ふこるも長閑又聞ゆなり春雨かそむ利根の川づら

望富士山

築地

武田金石

高嶺越えたりね登りて見る毎よいよ高し不二の遠山

三條教則の内敬神愛國

郡内

杉本安平

皇國こそいや堅からめ御民皆神あがらる道を踏おは

○我大御國の外國と異よて君臣の道正ければ、それを常よ忘

せして百事外國よ侮を受とと構へんこそ即皇國のさちざ

まなりけれ

淺草

院花翁

そべらぎよもろ向く民の心こそ皇國を守る大城也けれ

隆盛反そと聞よ 有無軒一口
置あまる惠の露よおのが身をばうさく消る物とあそ覺

堤柳

陸奥

下澤保躬

若鮎つる竿よ折心やかつら川堤のやなぎ春めきよけり

風雅新聞を見てよめる

全

風流士のうたふ詞の色々よさきこそよほへ文のと奇園

十二号初了ウ富士見御亭よての歌の作者保躬の保躬の誤也依て正と、さて其歌の腰句
泰よ見ゆるの見る目ようかぶの方實況也といひおこせられたれば爰よ退記をまかし所
がら竹の園生云々人間の種あらぬぞやむことなきと云へるよかけて皇統を泰山の安よ
譬るの祝意を寓したらんもとろからト泰よ見ゆる則實景あらざるよ非ざるをや

○旅客と引導醫との問答 桶川 津久井某

或人客舎よ按摩博士を招き先問曰舊二時間上下を操で料
幾許ぞ(按)微突して曰僕未時間を定めて按摩せし事なし雖
然公の言の如く預之を定めんも又珍奇至妙よからば則ち

僕一層勉強、舊二時間よ料金二十五錢とせん如何(客)曰諾
示談此の如き上の確証とよべき物無る可らと懐中より
時辰儀を取て細視示して曰今正よ八時也十二時まで按
摩せよ(按)少時思慮して曰僕は盲人也安時計を見て時を
知を得ん、僕よ於て一秒針の響数を聴き以て時間を計らん
請ふ耳邊よ此を置け(客)實然りと時辰儀を傍の柱よ掛け
坐を移していざと言ふ(按)曰既よ時と料とを定む宜く先料
の半額を受取べし(客)掌を拍ち快笑して曰余足下と是初面
會互よ疑惑ありふんを要とべし、允よ開化の世の斯こそ有
べきなれと乃半額を交付して曰、残半額の療治一畢らば償
べく一秒時間も淹滞せと、此論談中業已よ五十餘分時を
費したりとぞ「評曰世間如斯事多し宜しく考ふべし

○曉起聽鶯

牛門外史

竹暗如無路。曉鶯何處來。一聲呼夢覺。飛上小窓梅。

三月五日雪大作

琦玉

林谷齋

民權已許自由來。屈者皆伸閉者開。風雪乖時陋何甚。倒儂庭

竹壓儂梅。

待花

全

春在樵叟

無類殘寒勒好春。前山芳事誤期辰。痴情每日出門望。也是待

花如待人。

春雨訪友

全

岸澤晴巒

故人家在杏花村。侵雨來敲花下門。門外粧春紅間白。恍然身

入錦乾坤。

寄東京諸友好

全

嵩古香

輦下繁華勞夢思。孤寒我且笑吾痴。東山昨夜夢情雨。春到初
櫻第幾枝。

續岡野賢者所編風雅新聞

春在清逸

硯海思波一寸誠。幾編風雅頌昇平。讀來愛此新聞好。總是文
明鼓腹聲。

○疑問

京社

蒿溪學人

第十四號古香樵者ノ、春日經舊都ノ結句ニ、老樹何邊古帝宮
トアル、句ハ實ニ住也、扱、何邊ト云フ、吾邦ニテハ名家ノ詩中
ニモ往々見エタレヒ、漢土ニハ此熟字無シト予ハ思ヘリ、
カシ李杜韓白蘇陸ヨリ以下、誰ノ詩ニカ見エタラハ教玉ヘ
○狂歌 猫戀 盛岡 千秋堂
梅のはちうつるかと思ふ鏡板いまをさかりの猫の足跡

寄三人力車戀

相乗よのりて走れを小車のわだちもいとほれ込み

寄三時辰儀戀

空音とも雞をバ言ん爲方なきの枕どけいの片かふす也

題しらぬ

世人のこころの駒をさわがそる轡のおともえばし鳴覽

やがて咲く櫻島より吹そめて今の火花を散ふそ太刀風

これも

陣没の身の果報なり耳ツ珠妻子へ下がる祭資賞典

五十音字の折句(前号の續)

なへ配りよごり氷せきぬま田からね分て植よ残無き至

○儒者借倒之話

城東 柳門生

吳竹の根岸の里に遠く塵生を遁逃して茅蘆を占たる一の漢

學老先生あり此人也至極最上飛切の頑癖者流にして春日

南憐の梅枝籬を踰を見秋日西鄰の牽牛花垣を穿を見て

是即穿踰の盗なりと途方もなき論を吐の人也實に風雅の

情に疎濶なる憫笑するに耐ふり且言語粗暴にして大學を

誦にデガクなる音を以て故に衆第呼で捲舌先生と唱ふ

雖然此人亦好すべきの一癖あり何也曰毎に衆人に交接そ

るに尊卑もなく老少となく談話の際必經書の語を引て其

人の性に因て之を誠しむ其門に年來通學する一少年あり

此人の所謂新しい者好と云性質にて朋友に親むや僅々七八

日を経バ忽に倦厭して之を輕侮する事甚し因て先生數此

少年に論に論語公冶長の篇晏平中善與人交の語を以てす
 先是該少年先生に金若干圓を貸す返期遙に數月の前に在
 一日少年來て老先生に督責するに貸金淹滞の彌久なるを
 以す先生怫然色を作て曰子我を以四海皆兄弟と儒者
 借倒と云る川柳点と同視するう我の決て借倒さず故に平
 生子に懇々告て言ずや少年曰先生常に余に告に何なる語
 を以せしや更に之を聞んを欲す先生恬然として咳一咳し
 て曰く久而返之と記者曰此は是欠伸除に閑を鳥渡晒
 落られたるが主意の全誠るに在り諺の三月庭訓公冶長
 論語の兒輩すら能く諳記トたる語にのあれども平生忘
 失せるが如きも衆からん爰に拔萃のお心づけを見れば則
 省玉へ人と交るに久うして返(でない)敬の一字を忘れ

ざれを始終を全うせざる事あり要語歌又曰、交りい
 うに久ふありぬともなれあ過しそ友がきれなり

○五十音外ノツの辨(前号の續)

さて又五十音外にて拗音と稱ふるハ二音を合して縮呼を
 るもれを云ある事誰も々々心得たれ也現ハ五十音中又
 列しるや一行も其本源拗音ある事を知る者ハ蓋鮮矣、
 ア行の中にて第二位のイ音を上より二音合して縮呼され
 心や一行を生ト第三位のイ音を合すればワ一行をなと譬へばイア
 ハヤ、イイ、イ、ウ、ア、ハ、リ、ウ、イ、ハ、井、となる等の如し、此他每行
 も同トく第二位第三位の音と合呼されば每一行よりキヤ一行
 ヲ、ウ、ウ、行等と謂べき各二行を生を然而してや一行ワ一行又限り此
 例を以て合呼一試よ復別ハ拗音を生る事能ハ是其本源

拗音あるの明証也唯ア行の穩ある音故相和して目一音の如く聞ゆるより各別一一行となし單音も列して二行を置くと雖其實純粹單正なるもの四十音に限れる也(以下次号)

○俳句

垣まゆふ繩ゆるされし木芽哉
置ときくそれを名残や草の霜

月の本
素學堂

○狂句

立派な下駄を買て居る轉ぶ娘
買食をいれて八去とまさい物

○百々一

「ついで摺むちはなれた夫婦またとそること出来せぬ
いろは沓冠例も有唐最一入てお吳あハイナ 小てい

藤澤 眞 拙
不 莊 丸 曲

けふの來ぬどの郵便はがき、幾度かららみてぐちをいふ。
もう大概におしな子
山 豊

追加

霜氷る眞葛が原もうぐひすの羽風にかへる春の來に覺
くれ竹のふしみの里も鶯のさう鳴よりや春を知るらん
小車のめぐる月日もまらぬ間に春のさきおふ鶯のこゑ

附録 ○松壽連日次狂歌 三月分

稻垣 兼題 春動物 寄月戀
琴通舎 大人判

難波瀉みつ潮よりも蘆鶴のあしの錐なす芽をやよく覽
岩上亭
竹 芝

静けしや種蒔く田子のうらゝかに霞む蘆間に養る鵠群

梅枝もよそにそぎ田の濱遊ひほし餉こそ欲くなりけり

忍行く身社つらけれ月の夜みやみほしげなる已が内両

つくくとも見れば田螺ぞ動くなる臙月夜のあせの細道

○前號三丁オ初の狂歌に題えらすの四字を脱せり、四才頭脚のそを五丁オ俳句遺失のをいお、同丁ウ三行狂歌のりいさ、同八行乙音のをいお、七丁六行此音のをもかの誤、

同八行警バの下に一家血統の四字を脱せり、七丁オ第五行欺のキハ愆也今追正す

○廣告五十初度壽廷 四月八日於東 會主 居所猿樂町二丁目二番地 兩國中村樓上



風雅新聞 第十六號 明治十年四月十日發兌

○明治十年第一月上幸大和時余罹疾

而在家因遙望西天以賦一首 横田正綱

掛卷の恐うれども遠神吾大王の神ながら神さびせそと、
鳥啼東國も宮柱太敷坐て、璞の年の十年を、天下知食つ、
顯きや蒼生をなで給ひ治さまへば、老人も女童子も、泣兒
あす慕ひまつりて、生花の薫が如く、大御代の榮ゆる隨意、
皇祖の遠つみおやの、御靈をら和めまさむと、可美國大和
をさして、遙々臨幸よけれ、そこ故も御供つうへて、吾す
らも往まし物を、打靡き床も展ふし、蘆末の足惱をれば、せ
むすべの鶴寸をまらふ、うち歎き思ひけらくい、よしゑや
し腰まがるとも、よしゑやし足た、まとも、木綿襷肩よと

りかけ、倭文ぬさを手も取もちて、大御船歸來むまで、吹風
の荒く吹そ、立浪の和もがもと、綿津海の神も乞のみ、
赤坂の大内山の、高々迎へまつらむ事をのみこそ、

花下逢友

加藤千浪

立かへり再び花を見つる哉おくれて來たる友も引れて

事繁くて梅の盛をも人傳よのみ聞

て過したれば、花の必と思心のどめ

かたくて、まどしき程とい知あがふ

上野山をどふらひて

露園千秋

咲急ぐこずるを見れば待とぶる人より人を花のまつ覽

砌下竹

陸奥

下澤保躬

雨の夜も雪のあしたも静あるみさりの竹を心ともがあ

行路春雨

牛門外史

降るとなき野路の行ての春雨を濡ての後の袖も社しれ

陽曆

佐渡

藏田信中

一年ふふ、び春を迎よし昨日の月のそふことよして

寫眞鏡

全

牧野伸

見よくかる我ぞやさしき苟且も面影うつす鏡なふねを

春草短

鈴木重嶺

幾日あふば振分髪もなぞへなん眉毛むりりの庭の若艸

製茶

柳門生

かしなべて外國人もこのめとや業も勉しむ宇治の里人

西方の騷擾も心中恟々たるの折柄風雅新聞を一覽せしよ

早晩然る事等打忘れて不覺も詠ひ出たる 會田皆眞

西風さいかぜのある、を餘所あまそよさうりなる雅みやびの花を見るが樂たのしさ

記者曰本編第十二号よいろは文字を四字づ、上下の句の杳冠やうかんとして詠る歌いろはに
とはへどちとの二首を列記せり而して本号に至るまで其次を歌たるの蓋りぬるを例
のりるの二字を句頭くごうに置べきなるが之を詠むの難きよる此一首を歌が爲爰あ玉詠
を絶ん事の惜あはさ、姑く拙作を補ひて以て陸續高吟りんごうを俟つ

隣りん家かみな秋あき田たかりあげ賑にぎひぬ。一族いちぞくうちよりて鳴ならを連つ柳りゅう。

春霞はるがきうらるるの嶺みねも影見かげみえて越路こしぢはるるうも歸かへるかりがね

○何邊ノ古字附

全 擔版漢

第十五号、京きやう瓦が蒿こう溪せき學がく人にんノ、何邊なにへんト云熟字ハ、漢かん土どニハアラジ、
トノ高說たうせつ學がく人にん眼がんノ巨こほナル、覽らんノ博はくナル、敬服けいふくモ餘あまリアリ、僕わがガ
淺陋せんろう、彼か李り杜とトヤラ韓かん白はくトヤラノ大集たいしふニ至いたテハ、夢ゆめニモ涉獵せつれつ
セシト無なケレハ、復また何なにチカ言いフ、然而しかん吾われ邦くにノ先輩せんぱいニハ、學がく人にんノ
高示たうしニモアル通り時ときトツカケテアリ、是先輩せんぱいノ杜撰とせんナル

カ且かつ手てツクテノ熟字ナルカハ知しラザレレモ、僕わがガ思おもフ處ところハ、彼か
ニ那邊なにへんト云熟語ノ有あルチ見みレバ、那なにモ亦また何なにナルベシ何邊なにへんト
云いフモ妨たがナキカ、更さら又また那處邊なにところへん或あるハ何處邊なにところへん等らうノ語ことばアルチ見みレバ、
何處邊なにところへんチ何邊なにところへんト、縮ちぢメタルモノカモ知しリマセン、ナレレモ陽物やうぶつデ
ハアルマイシ、熟語ハ伸のびタリ縮ちぢマリスルモノデハ無なイ、トナ
レバ何邊なにところへんノ字あざなハ何邊なにところへんニアルカ一向いこうシリマセヌ

偶爲

全

頑石山樵

怒容どくわう可し惡にく成なり田でん不な喜よろこ色しき堪た憐れん淺草觀せんそうくわん喜怒きど非ひ眞ま皆みな是これ假かり靈場れいじやう吾われ
做な劇場げきじやう看み。(赤壁蘇せきへいそハ東坡也、王子權わうしけんハ王子權現也、此格ニ
做な成なり田でん不な淺草觀せんそうくわん等、唐人ニ作例ナクトモヨカラシカ

春初郊遊

全

鈴木秋芳

東風一線雨新晴。郊路追ひ蜂ち伴た蝶てつ行な。不見紙鳶天畔影。只聞天

畔紙鳶聲。

評風雅新聞

全

大鵬居士

花月體裁高突天香同品格下沈淵中間風雅占平地開化新

文是率先。

全

蚊々翁

電機近報

閉門何所聽炮響滿熊衢可歎無思慮魔陽一賊徒。

○西南又事起りし以來骨董店の古刀

蘭省亭花時

捨られし涙の雨のふる刀つりの間なぐ世も出よけり

老賊の暴舉も鎮撫せん事櫻花の咲

有無軒一口

咲ぬ間よとや鎮らんさくら島さつとふき出よ一陣の風

五十音字の折句(前号の續)

さるくどひかさの眞砂ふみしたき

松壽翁

まばゆしやみどり霞むむさし野のへなたり貝もほり得つるかか

琴通舎

謎歌(さくら)

盛岡

千秋堂愛竹

上下よさく久しく柞原を、そともかく風ちらしけり

○十四号、無茶先生の笑語、珍奇絶妙頗感服今鵜の眞似とやら雅の造意を亦なぞく

結城光昭

雅俗精選宜去俗風交絶交獨登嵩新古風聞兩個裡正除古

風益盛隆(注、雅俗の俗を去れば雅、風交の交を絶れば風、嵩ニ風雅、新古

風聞の中の古風を除れば新聞、合せて讀ば風雅新聞益盛隆の意

○紀元二千五百三十七年第二月開場

西國頑業惑亂會出品評

鹿子縞新製布

從來の薩廣がすり也、今新字を加へて賣

れども贗物なり

極内製焚附木

此薬法いまだ實效を顯とさず

漸急両刃の劔

むづかきしき劔也、脱と元の鞘も納まらば

走馬の鞭

洋名をイノチステッキといふ

洋風醜氣止

官許をければ專賣の權を失

暴發機

此器械發明人が捻ると忽運轉をなし破

糞船の束藁

るまで止らず實も猛烈にしてまづの悪き器械也

肥後隨氣

髪た刻切る程引詰て結ふたわし也

淡薄

よして味芋も及ざる事遠し(以下次號)

○ソツの辨の續

既も拗音あるが故も是亦國語の頭も用ふる自然少き等ふ

うく味とひ思ふべきなり(畢)マコトニ五退屈サマ

因云西洋より五十音の外も所謂全濁半濁拗音等の語

あるが故も亦各其字あり且入聲の語も固より有し者と

覺ゆ而して此字のなき者ハ蓋是ささよ云るが如く獨立

する事能ざる音あるも因る、譬へば Book, Letters 等

の如く同字を列記する等の例を以て讀しむめり、然れど

も既も此語此音ありて此字なきハ不足と謂べし、我國も

於ても從來熟知の事物も於て筆記上も一目了知を得る

が如きハ慣習のソツ字を假用て妨なきが若しと雖、既も

亦此音を通用して従て此字無ハ缺典と謂ざる可らず、况や

近來各國交際の道開け博く彼が事物を混用するの時も
方り、未熟知ざる人名地名を始め渾て國字も寫し流布そ
る中よりの本の音も讀べきや又ハ入聲も呼べきあるり、
我輩よりの辨知し難き多し(譬へば地名マツクマオンスの類)そ
れが爲彼此永く誤る無とぞ可らす(以下まことと數行言
のこしが有升、尙次号へ暫時お邪魔のお恕を乞ふ)

○俳句

此しらべ菊のものうの花よ琴 月の本 爲 山

三月卅日二本榎上行寺にて其角忌

初花やことしも爰又墓まゐり 全

同寺よ丸橋忠彌の塚あり 全

陽炎や罪も消えたる石の文字 全

瀧の裏見て越そ山や閑子どり 京橋 梅 子

うかくと行の氷あり春の艸 若山 知新舎春岡

近藤老人座右の銘、來人の朝八時より、夜話の十時かぎり

花の朝月のゆふべも詔らとぞ 全

○狂句

シンきりの焦て無なる薩廣蠟 皆 眞

賞典のたうもりやう地も暴も振 賛 々 亭

同木相求めて桐野ないさわざ 全

神威彌高し御陵ぎも畝火やま 六世 川 柳

○百々一 六世 川 柳

「人の噂よツイ出て見れを(陥頭揚柳枝 交更舎藏齋)

己被^{ステニ}春風吹^{シユンフウニフカ}ぬしも浮^{ウカ}れて那^ナ邊^ヘよやう

「思^{オモ}ひがけなく親^{オヤ}く成^{ナツ}て主人^{シユジン}不^{アヒシラ}相識^シ」

全

偶^{グウ}坐^サ爲^{タメ}林^{リン}泉^{セン}酒^{サケ}酌^{シヤク}かはそも花^{ハナ}のえん

遅^{トメ}風雅新聞^ニ

遅^{マデバカクキナ}遅^{トメ}遅^{トメ}遅^{トメ}と、唐人^{タウボン}の念^{ネン}悟^ゴ吐^ト待^{マテ}る、身^ミと、なるとも待^{マツ}身^ミと、なるなと、邦人^{ホウジン}の苦^ク理^リ言^{ゴン}也^ヤ、是^{コレ}待^{マテ}穴^{アナ}如^ニ待^{マテ}人^{ジン}十五^{ジュウゴ}号^{ゴウ}待^{マテ}花^{ハナ}云^{クニ}々^々と、吾^ワ春^{ハル}桂^{ケイ}先^{セン}生^{セイ}がまとし床^{トコ}よ在^{アツ}ての苦^ク舌^{ゼツ}也^ヤ、四^シ百^{ハク}四^シ病^{ビョウ}の其^{ソノ}中^{ナカ}で待^{マツ}ほどつらい物^{モノ}ない、眞^{マコト}なるかな言^{ゴン}や、僕^{ボク}高^{タカ}社^{シャ}の風^{フウ}雅^ヤ新聞^{シンブン}を讀^{ヨク}を嗜^シみ指^{ササ}を僕^{ボク}て十^{ジュウ}の日^ヒをまつ事^{コト}、宛^{ケン}然^ニ孩^ガ兒^ニが正^{テイ}月^{ゲツ}を待^マち蕩^{オウ}娘^{ニョウ}の嫁^{ヨメ}期^キを待^{マツ}が如^ニし、然^{シテ}而^{シテ}身^ミ僻^{ヘキ}郷^{キョウ}に在^{アル}を以^{モツ}て、發^{ウチ}兌^{ダイ}の後^{ノチ}、幾^{いく}日^カか經^ヘざれば、眼^メ觸^カ口^ク讀^{ヨク}事^{コト}能^スぞ、切^{セツ}又^{マタ}冀^{ネガ}ふ、今^{イマ}より僕^{ボク}が情^{ナリ}痴^チを憐^{アハ}れみ、發^{ウチ}兌^{ダイ}の日^ヒ、速^{ハヤ}く郵^{ユウ}便^{ビン}に附^カし僕^{ボク}をして賑^{ニギ}轉^{クワン}反^{ハン}側^{ソク}の恨^{ウラ}あからしめんことを

の恨^{ウラ}あからしめんことを

「待^マてばまつほぞなほ待^マちどしい、風^{フウ}雅^ヤ新^{シン}紙^シとまとし飯^イ籠^カ」

「箱^{ハコ}入^イりむそめと新聞^{シンブン}紙^シどい、ふるくなるれで氣^キがもめる

距^{キョウ}東^{トウ}京^{キョウ}十五^{ジュウゴ}里^リ、まつ山^{ヤマ}まちちて 馬^{ウマ}手^テ場^バ古^コ内^{ノウ}

附^{ツキ}録^{ロク} ○松^{マツ}壽^{シユ}連^{レン}月^{ゲツ}次^ジ狂^{キヤウ}歌^カ三^{サン}月^{ゲツ}分^{ブン}前^{ゼン}号^{ゴウ}之^ノ續^{ジュク}

十^十 月^{ツキ}見^ミればなくさめかねつ姨^{オヤ}捨^セの捨^セられし身^ミの死^シぬ計^ケぞ

十^十 春^{ハル}風^{フウ}のたてども解^{トク}せうき人の心^{ココロ}や月のこほりあるら

十^十 香^カもふりき梅^{ウメ}のはざりの牧^{マキ}ますむ臙^{オウ}月^{ツキ}毛^モの春^{ハル}の若^{ワカ}こま

十^十 落^{ラク}卷^{クワン}

十^十 佐^サ野^ノるる子^コ

十^十 多^タ麻^マ園^{エン}

十^十 蘭^{ラン}省^{シヨウ}亭^{テイ}花^カ時^ジ

十^十 十三^{ジュウサン}軒^{ケン}琴^{キン}次^ジ

風雅新聞 第十六號

君來ばと月をかことと待よは、物の影も驚りぬる

繪馬屋更

額翁

春の日のあがらの橋は鉋屑よりへるも夜さゝ鳴渡る也

秋吉

戯れて胡蝶も馴る野ら猫の畑の鈴菜もまよもくるひつ

康樂

夜を籠て口説とつらし山端も月の落れどおちぬ君とも

正誤○前号初丁オ柿本云々忍音の音昔李知郷の李郷の李卿二丁オ院花翁の院の院

同ウオと覺の覺の覽歌の昨者の昨の作三丁オ九行目互のいひ十二行目費のいひ

四丁オ三行目續の讀八行目住也の佳也同ウ鳴覽の鳴五丁オ塵生の世六丁オソツ辨の

文中第三位のイ音のイハウ七丁附録連日の月同ウ鶴の鶴けりけれ餉の蝶も作べし

風雅新聞第十六號 (更正三丁ウ第六行春在の挂の誤也)

墨水看花の文並俳句

狂歌

那何字の辨

詩

西國頑業惑亂會出品評の續

歌

狂句

百々一

附録

風雅新聞

第十七號



定價

一冊 金二錢三厘
五冊 前金二十一錢
十冊 同 卅七錢
廿冊 同

京橋弓町六番地

假本局

開新社

編輯長 岡野伊多
印刷主 野馬

但府外遞送ハ此外ニ郵便稅申受候

通例一冊ニ付一錢二冊以上六冊迄二錢

東京淺草觀音雷神門内	船橋	東京神田岩本町四十三番地	野村清左衛門
同 中軒茶亭	大和屋	同 同所同町三十二番地	藤代喜兵衛
同 新橋銀座二丁目	文和屋	同 小橋南町十二番地	廣田力松
同 芝國橋山五丁目	萬屋	同 日蔭町三丁目	伊勢屋勝次郎
同 芝國橋山五丁目	扇面亭	同 露月町新道	慶雲堂
同 芝國橋山五丁目	清樂亭	同 大坂心齊橋筋安土町	美のや万次郎
同 芝國橋山五丁目	駿河屋徳兵衛	同 尾張名古屋本町二丁目	北尾馬三郎
同 芝國橋山五丁目	内藤庄次郎	同 紀伊若山本町二丁目	山本屋長兵衛
同 芝國橋山五丁目	常陸屋五兵衛	同 武藏川越南町一丁目	知新田
同 芝國橋山五丁目	幸崎屋米賣場	同 下總千葉町本町一丁目	岸田屋文吉
同 芝國橋山五丁目	文友堂	同 上野前橋馬車道	伊藤周太郎
同 芝國橋山五丁目		同 高橋屋善兵衛	高橋屋善兵衛
同 芝國橋山五丁目		同 高橋屋善兵衛	高橋屋善兵衛
同 芝國橋山五丁目		同 高橋屋善兵衛	高橋屋善兵衛

風雅新聞 第十七號 明治十年四月廿日發兌

○墨水看花

福芝齋燕壤

思ふ事誰も残して詠め置ん心よ餘る花の曙といへる京極
 黄門の轍を踏で墨堤の朝櫻を見んと、未明の家を立出て石
 濱に來つる程、船郎の今起出たる顔色よて、清き流し、最
 愉快げ也、便船の人も無くて余一人を渡したれ心、其勉を勞
 ひて、さて堤よ至て見るよ、さし昇る旭の、爛熳さる花の露よ
 映走るの、恰も玲瓏たる玉の如し坐よ木母寺の方へ徘徊す
 るよ殆仙境よ分入る心ぞぞる、卒腰よ附さる黄金水を盡さ
 ばやと憩所を索るよ孰の茶店も未蘆の扉を開す適往合ふ
 人を見るよ行厨を提たる何方へう通ふ園戸なるべし、或
 俗よ沐髮と謂ふる蘿葡を擔ひ來るの、竹町の市よ鬻にや

風雅新聞 第十七號

あふん、或の種々の錦を一束として荷來る、堀切邊の花守
なるべし、更と踵を南へ巡して白髭の森を過り長命寺近く
來し、向の方より瓢を携て二人連立ち來る者あり、斯る寂
寥境界も亦我に似たる者もありしよと咫尺まゝと熟視
れを此の是三圍ある其角堂の庵主也けり、互一別の情を
演べ、再會を契りて袂を南北に分つ、左右を程、流を見下
そ一茶店の、柴折焚て釜を泌そあり、幸爰と停俟ひて彼、歴
る器を主の姫と托して酒爛めさせ、獨酌の樂窮なし、佳肴や
あると、睥睨も、昨日の殘物串刺の烏芋二三本と、茄雞卵三四
ある而已、渴する者、氷を撰と飢る者、食を辭せど、宜
なるか、此言を毎、甘んせば足ことを知るの戒なるべし、
茲に一層興入りぬ、氷無心と雖濃艶臨で波色を變、花不

語と雖輕漾激して影唇を動り、墨氷の眺望何所、優劣の
あらざらんも此邊を最勝景と謂つべし

嗚呼花よあゝ、ろの斧の柄や朽ん

天草島眺望

春の海島をつらねて音もせず在戦地 加藤晴山

草の紅の錦をなし骸の横りて堤の如し

泡雪やいのちを的の踏む、ろ 全

四月八日五街道人知命の賀

五十年夢よくらして花のあよ 月の本爲山

勇士出陣

歸らトと言ていでけり花の旅松村町 門人 朴 隠

不忍池の新道よ數多植付たる二種の若木

の今を盛み色を競て殊更に優美かれを

海棠やあらぶやあぎの腰摸様 全

これも又御代の思恵ぞ花よ酒 全

墨水 素學堂菊之

明ぼのや筑波をかけて花の雲

上野 全

何所見ても人が花なり櫻どき 全

○寶丹 盛岡 千秋堂愛竹

池端(守田)の菖蒲も似たる杜若八橋といふ邊(堀田)も見ゆ

精銘水 全

氷と云ば岸ばりぞと思ひしよ畠もまゝ出よける哉 全

兩國橋(長歌)

玉櫛笥二州橋の、人通り常にぞ多き、往車とはみぞしげき、

四時いつの、驛有名所の、何所のあれせ、打摩く春の彌生の、

須田堤花に盛に、妹が髪ゆふぐれかけて、そくひまもなし

寄衣戀 萬飾 結城光昭

氣を紅絹のうらみ重ねて懸衣きもせぬ君を如何待まし

落首 出目作

疵を請け先へ死の原跡追て腹をきり野も間近かるべし

愛竹

聲をだに只聞くまもど責寄れを落ちぬ人こそ心強けれ

旅の心を 千葉 赤面亭綾丸

旅衣ひもまぶあるを草臥の杖のやそめて宿よこそつけ

○那何の辨

牛門外史

那^{カストコロ}の指所アリ、佩文韻府那邊ノ注^{ヒケ}引ル古人ノ詩句ヲ見レハ
其^{アキラカナリ}意明也、又汝^{ナニゴト}何事ノアリテカ來^{キタ}レルツト問^{トフ}ニ、答^{コタヘ}テ、先日^{オノノヒ}托
置^{オキ}シ那^ナ異^イハ如何ト思^{オモヒ}テ也ナド漢土ノ文ニ多ク見ユ、那^ナト何
ト、義^{コト}異ナル苗^{コト}綠也(常ニ那^ナヲナニヅト讀^{ヨム}フアルハ別ナリ)

○題下加藤清正築熊本城圖上

同人

征韓事罷築熊城爾後徒傳國寶名今日忠魂猶不死鐵牆白
雉護天兵

桃林放牛圖 蒼々齋詩會 北島町 高林五峯

誅^チ紂威^チ敷^フ振^フ遠^エ陬^エ。迷^メ來^キ已^ニ放^ツ幾^キ多^ク牛^ウ。明^{メイ}王^{ワウ}德^{トク}洽^カ及^フ禽^ニ獸^ニ。更^ニ與^ニ唐^{トウ}
堯^{ヨウ}虞^ユ舜^{シュン}一^ニ俾^ス。

風雅新聞發兌 城東 柳巖逸人

錦繡揭來最妙工。名馳南北與西東。里談街說雅交俗。宜讀此

編^チ看^ル國^ノ風^ヲ

倣^ニ回^ニ文^ニ體^ニ

中田 陽 鄰

亭^{テイ}柵^{サク}幾^キ架^カ岸^キ西^シ東^{トウ}。漾^{ヤウ}々^々春^{チュウ}江^{カウ}浴^{ヨク}日^{ニチ}紅^{コウ}。青^{セイ}柳^{リウ}垂^チ邊^{ヘン}鷺^ロ白^{ハク}。汀^{テイ}煙^{エン}暮^モ
散^{サン}半^{ハン}帆^{ハン}風^{フウ}。

閨恨 埼玉 聽^{テイ}濤^{トウ}學^{ガク}人

阿^ア郎^{ロウ}近^{キン}日^{ニチ}在^ニ何^ニ邊^{ヘン}。一^{イツ}片^{ペツ}相^{サイ}思^シ夢^ム遠^{エン}。牽^{ケン}袂^{ケツ}上^{ジョウ}繡^{シウ}鴛^{ユン}應^{オウ}笑^{ガウ}妾^{セツ}。孤^コ燈^{テイ}徒^ト
守^シ十^{ジュウ}餘^ヨ年^{ネン}。

左ノ一律ハ曩日日就社ニ投ズル所、該社新聞ノ體裁ニ適セサルヲ以テ掲ケズ、既ニ陳
腐ニ屬スト雖貴社若シ餘白ヲ貸スアラハ幸甚

賀^カ下^ゲ永^{エイ}井^{エイ}碌^{ロク}氏^シ出^デ園^{エン}圖^ト歸^キ上^{ジョウ}家^カ 城東 柳 門 生

空^{クウ}倚^イ鐵^{テツ}橋^{キョウ}過^カ九^ク旬^{ジュン}。一^{イツ}朝^{チウ}振^{シン}拂^{フツ}垢^{コウ}衣^イ塵^{チン}。籬^シ邊^{ヘン}梅^{メイ}樹^{ジュ}迎^{オウ}君^{キョウ}笑^{ガウ}。枝^シ上^{ジョウ}鶯^イ
鷓^シ喜^キ頻^{ヒン}。雄^{ユウ}筆^{ヒツ}有^{ユウ}聲^{セイ}驚^{キョウ}世^セ夢^ム。赤^{セツ}心^{シン}無^ム撓^{ガウ}覺^{カク}頑^{ケン}民^{ミン}。擊^{キツ}杯^{ハイ}大^{ダイ}叫^{キョウ}文^{ブン}檀^{タン}。

上。復得三不羈自在人。

○西國頑業惑亂會出品評(前号の續)

世を揉皮の動亂 評判程の強くなき由、買かぶる可らず
日和見眼鏡 一名傍觀鏡 此眼鏡の妙、實又窮むべからず、時又從

て變化と、然ども心を定めて見るときの方向判然たり
自轉車 英雄人を欺くの口車より發明して一時輕とづ

みの飛乗多くあれども、此車下坂よかる時の將基倒と
ある至極危き車也、舊名又泥まらず、ミツガラコロブ車と翻と

べし是までの覆轍を見て知らるゝなり
右陳列中二三を擧げ拙評を加へ貴社に投せ若編輯先生出

品の検査を添うし此を餘白に開場せば幸甚、埼玉縣桂壽
○往昔司馬光丸き枕を造りて夜中曉とも云せ、目覺る

ごとと書讀よりきてふぎを思出て横田正綱
怠りの塵も山とやつもふまし誠しむべきの枕なりけり

花をよめる二首 盛岡 梅園
宮木ぞとよきてや吹ひ花の山科戸の神をこゝよ祭らば

をるのをし折すの風又散とてん櫻の人の物おもひの花
聊病間ありけるよ花盛など聞て 加藤千浪

彼岸とおもひしものをのりかへて堤の花よ小舟擢せん
花の歌あまゝ詠ける中よ 野田千秋

歸り來て山分衣着換れとありぬさくらの袖よりぞ散る
いろは上下沓冠(前号の續)わかよた贄々亭

わけまどひ霞中よ啼雁かよそ目をぐさき森のをちかた
とたくしもお相伴 有無軒

わりなくも我側去ぬ儂かよそよありぬと聞ける占かた。

○狂句

名^かの煉^{れん}化^{くわ}、廉^{れん}で^のか^くて高^{たか}い家^い
もめて居^ゐる、人^{ひと}も嫌^{いや}がる西^{にし}の薩^{さつ}
久 八 木
南錦舎樂眼

○風雅を嗜み風雅を慰む風雅人よも、風雅の趣を異にする、種々なるべし、前々より五十音外ソツの辨を記載たるが如き、面白からず、よして如何との忠告もあれば、又數遍熟讀て益を得たりと言ひ越れしもあり、或^{ある}に國字格の如き、一二校正の屈ざるあれば則難く申越ざる、あり、未知ずして知ん事を勉るあり、或^{ある}に孰^{どつ}でも一向度外もあり、或^{ある}に假名遣など云^いふ無用也とせるもあるめり、雖然本邦にては必假字を正さざる可らざる事抑説あり、序あらば詳悉いふべし、今本編の盡く其筋を正し(流布の假字格の實類)は雅言の限^{かぎり}に記^してあれ^ば論^をし、今^の俗談俚語と雖^{いへ}恐^そく之^をを正せり、譬^{たと}へば御前長え、然也亡者、等の語^ごに至^{いた}るまで一字の誤^{あや}れるを見^みて必^{かな}らず之^をを正せり(狂句百一)

の類よの品よ寄ての免もあり)さて彼むだ事となすらん人の姑く措も、偶秀句物名折句沓冠^{さくかん}を唱^{とな}るもの、さよ^い出^だせるいろは云々五十音字云々の類投與せられたる多きが中^{ちゆう}に、譬^{たと}へば五韻の配字あいうえを、わゆるを互^{たが}ひ混^まり誤^ごり、あ行ををとし、わ行をえれとし、又^{また}にわわかふこゑて等^らにあたる國字の詞を以て、去^さたてられたるなど、頗^お妙案巧作あるもありて最口^{さいくち}をしけれども、没書^{ぼつしよ}たるあり、さまたちらぬも登録^{とうろく}たるあるに此^{こゝ}所以^{ゆゑ}あれば、投書^{とうしよ}を辱^はうせしめらる、の各位、この義を恕^{ゆる}させ給^{たま}ひてよ 記者謹白

○百々一

(漢語入の續)

黛 山

「君^{きみ}のそでから出^でたこの艶書^{えんしよ}、無論^{むろん}うとさきの確証^{かくしやう}據^こ
「後年^{ごねん}をおも^もうて節儉^{せつけん}さんせ、結局^{けつぎよく}うはさ^さい不^ふ經濟^{けいぎ}
風雅新聞投書家の人名讀込の中 賛々亭
「つ頼^{らい}とかれとかねての知れど、見れ心^{こゝろ}生^あかか^かやくの種^{たね}
「後^{あと}でかけ琴^{こと}いとりよがまよ通^{かよ}ひつめたるとた舍^{しや}意^い地^ち

國名入

「どこのドイッも浮説のよナ何日平全

胡虜良人罷遠征やがて芽出度親

「マッマへ心で寝の寝さけれど梅園

無題

「春の風より財布の金ダ百萬一時盡駒里紋太

含情無片言妙なびかす藝妓柳

○社告

本編の月々發兌の度數を増すやうと愛顧の各位より逐次忠告あり、然るは因循今日
に至る者の實は本意は非ざれども、客冬火災罹りし以來未不便の事ありての故ある
が今回社員相談して從來十日二次の刊行あるを、七曜の順に換へ、月々四回或は五回の
事もあれば自今之は據んとし、ついでに活版方の都合もあり且七曜中の日を定むるま

での間第十八號發行の期が少のびませうから其段幾重も御宥恕下されたく、出版の
上の一層の眷顧を是祈い也 十年四月廿日金曜 社中一同敬白

○前金受収の分、冊數切に至り御断り無之に引續き遞送可仕、此段御承引可被下し

附録 ○松壽連月次四會目狂歌合

丘通舍 兼題 松間花 寄星戀

丘 琴 德島 美住

ねもよりにて琴彈艸と一組ある三味線のいとくくら花

名古屋 秋園

咲をる花は埋きてあふ山かい木の松も雪れ下くさ

德島 對 峨亭

さし覆ふりさ松下雨乞し小町ざくら花さきよけり

全 神のやみね女

風雅新聞 第十八號

立たかくと松のひまよりさし視のく櫻のなの先計り見ゆ

十三 八

徳島 古和良野

遠とほざりる君の雨夜の星あらでちとも影を見せぬ強つ面あ

十三 十三

博多 龜齡亭

腰こ馬ま山や松まのさくらと木がくれてはなのみ高たく勻ひ去哉ぬ

八 十三

徳島 月窓庵

明あ方かよなきとも見えせ下あ紐たを誰ときほしと言おこし劍

八 十三

名古屋 菊酒屋

あひ見まくほしの影かさへ我わ方かへうーや今こ霄よも流ざり鬼け

○廣告

(以下次号)

書畫雅集 五月十三日於東雨
國中村樓二不論晴雨

居京橋弓町二十五番地
會主 前島 和橋

風雅新聞第十七號

這回外發又滑稽の二字を冠する説

戯猫奇談

東西問答

何那我記返文

詩

狂歌

孟子失中

皆目話何覽會出品評

痴説一則并百々一新曲

謎 狂句

附録

滑稽風雅新聞

第十八號



定價二錢二厘

定價

冊冊冊冊冊

但府外遞送ハ此外ニ郵便稅申受候
通例一冊ニ付一錢二冊以上六冊迄二錢

京橋弓町六番地

假本局

開

新社

編集長
印刷主

野岡

馬野伊多平

東京淺草觀音雷神門内

同地中軒茶亭

同新橋金六町四番地

同京橋銀座町二丁目

同兩國横山町二丁目

同芝川西森下町五番地

同人形町通元大坂町

同本所松井町三丁目

同赤坂裏一丁目六番地

陸中盛岡吳服町

陸中盛岡吳服町

幸野治兵衛

文友米賣場

靜屋堂

常陸屋

東京神田岩本町四十三番地

同所同町三十二番地

同中橋南橋町十二番地

同小傳馬町三丁目

同日蔭町壹丁目

同露月町新道

同大坂心齋橋筋安土町

同同同同同同同

同同同同同同同

同同同同同同同

同同同同同同同

同同同同同同同

同同同同同同同

同同同同同同同

同同同同同同同

同同同同同同同

同同同同同同同

野村清左衛門

同藤代喜兵衛

同廣田力松

同伊勢屋勝次郎

同慶雲堂

同美のや万次郎

同北尾馬三郎

同山本屋長兵衛

同内田新吉

同知新屋文吉

同岸田屋太郎

同伊藤屋三郎

同島屋喜三郎

同高橋屋善兵衛

同都川孝太郎

同杉の屋國助

滑稽風雅新聞第十八号

明治九年五月十五日發兌

○這回外簽又滑稽の二字を冠らざる説

滑稽と云ふ熟語を近世能く弘めたる膝栗毛の先生が巨擘也、爾來彼膝栗の劇場や寄席にも演りて「待居るからば」にきて「吳」なと艶書く婢輩も、此熟字をば自解して、可咲こと、知ぬのなし、否、十惚、二酒、醜態極る件をのみ謂と思へるも亦有り、で、あり升、一、滑稽の字、楚辭より濫觴り史記の滑稽傳、猶俳諧のごとし、注し、俳諧、諧謔共をうし。みを言ふ、則、風雅の裨補なり、然而、滑稽も古と今の差ある事、由、又、眞、二、並、目、のみ、で、倦、厭、や、そ、く、悦、過、れば、殺風景となる。等の趣、既、又、初、號、の、題、言、も、概、略、書、て、置、ま、し、ま、が、何、分、外、簽、の、見、う、け、が、風、雅、な、れば、投、書、も、自、然、眞、注、連、が、八、九、所、謂、

をのしみ滑稽の一二の編者ダ本意も充分ならず然とて今更外簽を滑稽イ(可取換)とも出来ぬ故滑稽の二字を冒頭より冠せて之を標的となしよばおもしろをのしい短話の類も寄贈なんと一夜の寢覺も思つき則枕邊に筆を把て聊滑稽の所以を記す隣家の鶏ダ滑稽考句滑稽考彩

○戯猫な諺

續 生

或無商業家も最剽輕なる小猫ありけり名を微點となん呼ける、舉家が摩擦して寵愛しけり一日賓客の來るあり主婦が茶を煎んとする際彼猫平生たる伎倆などして狂ひけるよ、客も興入て居たりしが忽然誤つて傍に置る急須を覆轉へしけり、ドウした機會の小猫の頭へ急須が冠つて宛も猫の呑れよ如なり之を見て満坐の人ドット笑ひけり紙袋なす

ざればボンと蹴リヤニヤンと鳴事もならず時よ戸主外より歸て、咳一咳汝等之を何と見て笑はるや、之は是古來傳稱たる諺也、汝等謹んで吾言を聞けとて曰急須覆て猫を噉

○西國の事ありし以來起居不得忘 牛門外史 國分なる憂き忘艸名よの負と思ひよもゆるばあり也

宇都谷の新道を越ゆとして 小出 榮

今つくる宇都の山路のうつろ道通ふの夢の心ち社をこれ

函嶺よやどりて 全

明あばと思ふ箱根の夜雪解てもいこそ寝られさりけれ

聲の立けれを悦ばしさよ 加藤千浪

驚よおくれたれども初音をば時鳥よゆつとさりけり

此歌の久しく肺病を煩はれしが快方とて詠れし也

堪忍

全

何事もいとで忍ぶのそり衣ふりきよゝろの奥に社われ
吾日三省君身と云事の今朝の思出られて 露園千秋

着かふれとらひくーさよ吾と吾姿見らるゝ夏衣かか
西郷も遠く學ぶざるよりわたり而頑固無雅ある事とやと
歎く折柄面堂ぬしより風雅新聞を賜れるよ 函館七十九翁 樂

ふみ見てもあふぬ方よや迷らん斯る風雅の道を知れば
いろは上下沓冠の續き 有無軒

れいあふぬ病の床に聞ぬるぞつくく 歎息入相のかね
郡内産物 甲鶴 杉本安平

名も高し外國人も仰ぐある不二のそそ野の廣幅のきぬ
○東西問答 香月庵主

京都の人、東京の人よいふやう、常の詞のともかくも、歌や發
句の詠らぬやうに、ユウハラント聞よくうオマス、アノおま
とん方ハ元日や田毎のしこそ戀しけれ、とイワハルゲナ、ホ
ン、チカシ、東都の人答て、ソ、云オメ、方、も、ひ、か、ら、れ、て、次
の間よ立つ寒さ哉、と云ヤアないか、ソ、カ、イ、ナ、其、なら、お
互に交易トして置きませう

○孔子の賛

同人

意必固我捨テ可モ無ク不可モ無シ

○何那我記返文

擔版漢

何ト那ト義ノ異ナル由縁、那ハ指ス所アリト牛門外史ノ教
諭謹デ領承セリ然而擔版漢ガ十六号ニ、那モ亦何也ト一言
セシハ、自家の塑說ニ非ズ、蕉中氏の文語解一卅五
六如氏ノ葛

原詩話後編一丁廿一等ノ餘唾ヲ舐テ、那モ時ニヨリ何ノ義ニ彷彿スルヲアルカト思テ言シ也、シカシ開明ノ今日大典ヤ慈周等ガ嚙語ハ取テ除ヨト一喝セラレバ擔版漢ハ拜左右何那ト云テ遷延却退スル耳、那ト云テ何ンダト闘辨ハ致マセヌ

○題ニ杉浦之幹對芙蓉樓

春桂 叟

好對芙蓉結構成。雪輝照出讀書精。斯樓斯嶽仍斯主。万古扶持不盡名。

同湧翠軒

全

喧塵蹤隔讀書莊。兀坐古稽芸送香。俗紫凡紅窺不得。一軒湧翠万縹囊。

春日即事

春挂老人

金衣公子囀春風。默坐貪聽耳太聰。忽被家僮笑一笑。先生平

日果伴聾。

驛柳

中田 鷗鄰

鏡路一條車似流。分明開化仰皇猷。誰知煙柳閑如睡。無復離人繫紫驪。

○狂歌

松壽翁

不^ハ二^レの嶺^ニ又^ハ不^レ老^シ不^レし^キの藥^ニ有^リと唐^ノ土^ノの山^ノ師^トぞ言^ハ始^メよ^ケる

待戀

全

契^チお^キきて來^コぬ^ハ今^コ霄^トも疑^ウひをい^ダきて獨^ヒ寝^ムよと成^ルらし

更衣

盛岡

梅

園

脱^ヌかへて肌^ハ又^ハな^クまぬ麻^ノ衣^ハい^づこの妹^トグ手^ヲ織^リあ^るらん

王之不王 一任

全 千秋堂

非不能也 一ふとも 家ざくら 折枝をば 我不爲なり

五十音字 折句の續きを

やま櫻いろ香を籠てゆふ霞えもいひ知ぬよそ目也けり

○孟子失中

林谷齋主人

賢者亦樂此手

鼻グスリ

孰能一之

頭髮ノ風俗

一酒之

漢家醫師

薄手云爾

半開ノ人情

氷哉氷哉

洋醫ノ藥棚

得其所哉

僧侶ノ定藉

○俳句

卯の花よぬかす止る雨一日

淺草

梅 一

土ふみよ烟へかりしう巢立鳥

風細う氷田々々まうくかえづ

全 月の本

此人よして此病ありとの古事知す予の七十四歳まで無

病息才にて俳諧三昧にあそぶ

餘念なく椽のはしるやはな心

素學堂ぬし去る四月廿五日又九州路へかしま立すとて消

息せられけるにえ逢で後よ

おとづれて姿の見せず時鳥

肥後の戦争を山越しに聞きて (郵報)

初雷をさくや山よの残る雪

雉子雲雀この頃慣し筒の音

鎮臺兵の入込けるに右往左往町中の騒擾いとん方なし

主のない荷物もあるよ花中

○皆目話何覽會出品評

親の撥 飲食や婦人の前にて金貨を撥むこと妙なり故よ
一名を撥返といふ、遂に實家の血脈の糸がきれて、胴する
どこも鳴らなくなる
出品人 會田皆眞

能待鼓 人の牘鼻輝で角力をとるよドンくど叩くなり、
面の皮千枚よて張る、此酒妄の醒顛十日を限らず常よ坐
敷を以て奴憑となす(以下次号) 全 琴通舎

○痴説一則

崎王 牛後迂夫

オヤ阿新娘相變らず儂を遅せてサ。新も些子疾く情客よ顔
が視せたくて、製本をするよ直よ本社を駈出して來たけれ
と途中で新を無理に牽袂て放さないの、ツイモ一夕々
々と止停られて居たのサ、ホンニ老僧の、ひつこくてすかな
いよ、虚言だどお思ひならコレ御覽

「帯をとかれて検査をされて新聞がコンナよもめて居る
オヤ百々一でそ子私ハ沓冠の残を一章 小さん

「こ、ろ隅田よ氣も浮くかもめ、花をみめぐりむのふごえ
續きをひとつ補ひませ

「てくづり常だとうたがのまやんと、つらい勤のほんよまあ
さて其つきを、まんばしの五ぞんど頼 生

「さめて夢とわん心したガ、凶事でもあろうと胸さどぎ
新曲 蓬室

「二人すみ田の片ほとり、世を外の花の佗住ひ、遂て添寢の
口舌も痴話も、外へもらさぬ中なれや、時鳥さへ忍びなき
○狂句 駒のや

親の胸よめて来るのも學の徳 五 連

十三里の響放屁千里止らず 崎王 三友享

見て来ると天狗て話す隠れ杉 鹹齋

馬鹿兒の玄まつ親の持餘し 花時

薩摩淨瑠璃出語りで無本なり 盛岡 愛竹

近來〇〇見え旭の佛が、高島へ映さぐ面白かゝ、謎と

勸めて貴社の地面も種蒔くもの、 京屋ます

(一)石橋 行を慎む人 トク (記者曰、近例も倣ひて

(二)街燈 維新の聖世 トク 心の次号へ)

(三)煉瓦住居 堅固の細君 トク

〇申譯 心へ次号へ)

さてもく面目が脱走しまして何とも申上やうも紛失いたしました、 本編の發兌

從來十日ありしが年末の所謂大卅日、新年の初刊行の九月の菊の十日より一般其上
二月の卅日がお不在、都合も不字を冠り升り豫て五日日操上んと思ふ折から前
号も陳一〇如りの協議で土曜日の發兌と決着、活版方も輕躁諾、四月卅日の刊行を五
月五日と迂延し、處、新器械を増殖せしめ、四回の副急ぬと、活版 缺を爲た
よつと恍惚と一〇俄の齟齬、延期したかひもなんぎの申譯、五日くと御催促も應ト
かねたる不体裁、ふてい奴との御詰責を、十日五ゆるし下されて五日のところ今迄は
らく御さ、そみを願ふよかん 社中一同敬白

附録 ○月並狂歌前号の續

松がえよひさうけさせて春風をこと、思とぬ山櫻ばち 倭文纏

いたづら顔をみそくの流星よばひもやらぬ戀ぞ墓無 多麻園

落卷

年としごととしとよよかかああららずず句こふふ櫻さくら花はないいくく十じかかへへりりとと松まつのの思おもととん

全

岩上亭
稲垣

よよばばひひつつるる我われああだだしし名なをを明あか星ほしののききよよろろくく目めししてて云い人ひとやや何なに

同題の中松間花を

多比樂

枝えだううははとと松まつののみみどどりり又また咲さ花はなもも今いまひひととししほほのの色いろままささりり晃けり

全 寄星戀を

屋寸樂

ああふふとと聞きくく星ほしのの契ちぎりもも空そらこことと今いまのの身みのの上うへもも知しるる哉や

正誤○前々十六号四丁オ(さくら)の謎歌、上下よさく久しく倉卒の讀違へよて

くさにかへしてなり、前第十七号初丁ウ第七行幸の下さしほのいいひひ、三十才十一行こ

つけのつひひをを、七丁ウ狂歌第三首腰馬の腰くらの鞍くらもも作つくるるへへききなり

風雅新聞第十八號

定價三厘

醫生買物

狂歌

續東西問答

詩

著目話何覽會出品評

歌 俳諧の説 並俳句

うぬばれ

狂句

謎

新曲ど、一 附録



滑稽 風雅新聞

毎月五日三度發兌 第十九號

定價
 一冊 金二錢三厘
 五冊 金二十一錢
 十冊 金四十二錢
 十五冊 金六十三錢
 廿冊 金八十四錢
 廿五冊 金一百零五錢
 卅冊 金一百二十六錢
 卅五冊 金一百四十七錢
 卅冊 但府外遞送ハ此外ニ郵便稅申受候
 通例一冊ニ付一錢二冊以上六冊迄二錢

京橋弓町六番地
 假本局 開
 新社
 編輯長 岡野伊多
 印刷主 野馬

東京淺草觀音雷神門内 船橋屋
 同 同地中軒茶亭 大和屋
 同 新橋金六町四番地 文屋明社
 同 京橋銀座二丁目 萬屋孫兵衛
 同 兩國横山町二丁目 扇面亭
 同 芝田川町五番地 扇明亭
 同 深川西森下町 清樂堂
 同 人形町通元大坂町 駿河屋徳兵衛
 同 本所松井町三丁目 内藤庄次郎
 同 赤坂裏一丁目六番地 日高屋五兵衛
 同 兜町三番地 幸崎屋米賣場
 同 駒込蓬萊町 文友堂
 同 虎ノ門琴平町 靜霞堂
 同 千住南組小塚原町 常陸屋
 陸中盛岡吳服町 平野治兵衛

東京神田岩本町四十三 野村清左衛門
 同 同所同町三十二番地 藤代喜兵衛
 同 中橋南棋町十二番地 廣田力松
 同 小傳馬町三丁目 伊勢屋勝次郎
 同 日蔭町登丁目 慶雲堂
 同 露月町新道 美のや万次郎
 同 大坂心齋橋筋安土町 北尾馬三郎
 同 同博勞町一丁目 山本屋長兵衛
 同 尾張名古屋本町二丁目 内田新吉
 同 紀伊若山本町二丁目 知新社
 同 武藏川越南町 岸田屋文吉
 同 下總千葉町本町一丁目 伊藤屋周太郎
 同 上野前橋馬車道 島屋喜三郎
 同 横濱太田屋四丁目 高橋屋善兵衛
 同 同尾上町五丁目廿三番 都川孝太郎
 同 同 廿一番 杉の屋國助

稽滑風雅新聞 第十九號

明治十年五月廿五日發兌

○醫生買物

埼玉 津久井姓

醫生商店ノ物を買ひ、印紙判取帳ノ代價の請取証をとり、物
 届け呉よと頼置て歸りぬ、然る商物を送らず、醫翌日取
 來る、商日昨日公渡たり、醫愕然として曰余請取らず、汝渡
 したる証據ありや、余又於て代價の請取証を所持せり、商
 日代價の請取証既公よあらば、物の預り証も亦必公の方
 があるべき筈也、此儀如何、醫曰預の証書の無し、商嘲笑し
 て曰無証據の方今立す況や公裁を仰ぐを得んや、醫判取帳
 抛ち歎トて曰、嗚呼余從來患者を診し面を望み聲を聴くや
 則其病根を察と、然而して此商人ノ斯の如き奸病のあるを
 知ざりしは是余未至らざる所ありき、此上尙博く諸流よ

涉り修行せざれば、中々以て庸醫より倭漢蘭と

○狂歌

獸

ばんくが痛いと虚言をつきの夜も鼓の稽古休む子狸

藝妓

轉ばして見ばやとぞ恩ふ腰輕も棚の達摩ををどる唄女

東京名所の内 (今様)

岩上亭

そぞれ下り家根船も、玄ばしかちふる夕立のはれては

れめく月影も、ぬれて色まそ首尾れ松

貴社新聞もおひく記載あり一五十音字折句の歌とりく

感ト入ぬ、さてラリルレロをばいゝ詠るゝやふんと後号

の出版を待侍るあひぶよ、おのれも試み詠る 面 堂

らく焼のり休好みのるを見てれい義可咲きる開の客

序に申す貴社のお説の如く、げにラ行の鄙き音なる故か、下

に働くのみにて上に置る國語のあるを知らず近世季鷹が歌

に「埒の内」に競る馬の勝負も争人の鞭の打方「只是を知のみ

○記者曰此季鷹の唯字音をよみ入れし歌なるまで也字音の上にていへばラ行他行の區別なし抑字音の漢語なれば國語に打まかせてよまざるを常とするものからたましく菊の如き其音いかめしからず且久しく耳なれば其訓ならざる事を忘れたるが若し但字音たりともつかひこなしの作者の手際にあたり警へば勅なれやとよめるなごの拗音なるすら耳ださず此れ等の餘人の復よむべきに非ざる也さて狂歌の歌によみ字音ならざるを得ざるが故にいと狭くして似よりの詞を多かりなん爰にこれかれ寄せられたるを併せて掲ぐ

らりるるの折句

古面翁

埒もなや情氣あらそひ類の友禮義も知らず論ををる人

老婆心利發の要に留守たのみ禮義のべ行く六阿彌陀道

老母泣く臨終ぎはにるのなき連判帳の六ぶん目なり

全

欄間繪の龍もあれ出ん 瑠璃殿に蓮池を臨む 樓閣のうへ

○續東西問答

不記姓名 吟杏庵主

前号に香月庵主のかゝれた東西問答とあるを見ましたが
夫につき私も一寸思出した事があり升、これに能く人もい
ふ事で五在升が東京での観音をカンノンと音便でいふを
西京での正しくクワンオンと字音の通りにいふ、さうかと思
へば亦東京でも源右衛門や善右衛門など云名をば、字音の
通りにゲンエモンだのゼンエモンだのと呼び却て西京の
人がゲン子モサントかゼン子モドンとか音便で唱へ升、是
では双方とも字音通と音便とが錯雑に成て、孰とも極がつ
かないからカンノン様を京都へ遣ともゲン子モ殿等を東

京へ引取るともドツチか一方へ片づけるが宜らうとも思
これ升が既又香月庵先生のお説又例があるから是亦やは
り交易としておくがよう五在ませう

○春日村居

培玉 新井秋巒

黄菜満畦晴日薫。看來情思不堪欣。孤燈闌夜書窓課。油價今
年減幾分。

櫻花

全 春挂仙史

春園好合ニ獨稱尊。不競東風廿四番。我與此花如骨肉。此花也
是。大和魂。

同

全 懶 叟

名花一種海東春。夷李狄桃難可群。敢着凡詞澆高格。只言神
聖產成雲。(右三首詩仲春下旬早已到手有故而採錄後期宥恕是祈)

○皆目話何覽會出品評

能樂鞍 常用の鞍と違ひ馬バウリであく鹿も置く也

又阿頼馬といふ牝も置事あり、心の手綱をゆるめて此

鞍も乗時ハ宇宙至らざる所あり、上ハ有頂天又昇り下ハ

地獄の穴も入る、ながく用ふれば一變して身上唐鞍と名

をわらたむ 出品人 結城光昭

男莖槍 遊山も生ずる無苦勞を以て製す、少も鍛冶ハ

關係せず、柄ハ種々よて約束を締柄、極ダ梨地、耻の上塗此

他尙あり時暴論を出てハ看を突 出品人 賴生

一聲よあく音といめよ時鳥まぶ我のみと人よほこらん

短夜月 伊平

さよ深きうのれ鳥を偽りよあさでえらみぬ夏の月あげ

○俳諧の説

記者曰前号も申さ通り滑稽と云ハをらし。事ごとハ誰も

知ざるなし而して俳諧と云も亦をらし。みの事ごとハ蓋知

者寡シテハナイ知ざる者衆シ其故何也、今更言んも古池や

蛙飛こむ其水の音も聞えし蕉翁の流を汲者、都も鄙も

蔓延して其繁茂ある事ハ詩歌連俳もオット此一字を除き殘

の三個をヒッくるめて樽を言ハ九舍をさくべし、然而此俳諧

(俳諧とのみよてハ義をあささ蓋ハ一の片歌と謂んを略呼

せしあるべし)といふものよをらし。みと云滑稽ハ風躰も聞

えぬが常も耳慣て居る所以也さてをらし。みとて其始絶倒

つて失笑が如きのみを謂も非也古今集以來秀句則兼用

の詞を交へたる多し、彼俳諧と云上流の片歌より、正風俳諧
論も後土御門天皇「おもしるさたまらぬ春の小雪哉、宗祇法
師」年もけさあけ「明」のいなきの一夜松、支那宗鑑「うづき」
来てねふと「痛」太「痛」なく「泣」や時鳥、良暹法師「紅葉のこがれて
見ゆる御船哉、なぞ見えたる則所謂をのしみ也、然而今日の
如き躰も成至し次第の又説あらん、その此道の宗匠より報
道あふんをえばく俟つ

昨春花の頃より日の隅龜翁山と云
麓も柴の庵を設け五岳上人常春亭
と号せらる嵐山も似たる處也(郵送)
我が春の都ご、ちの花ざりり 豊後日田 佐藤可梁
月雪も花もあふはんいはの友 全

二朝を掃き分けてありおち椿 全
かきつばと咲て有けり澤の家 月の本爲山
さつとりと更衣してあふぎ折 全
脊戸山やとつ不如歸啼おろと 全
○うぬぼれ 米直志

うぬぼれといひ、もと自惚で而後他も自に惚るマラウと思ふ
を謂也、此自惚も種々だが茲に一個の自惚先生あり、自惚容
色がい、音聲がい、保度がい、彼媚も自惚ニア染底惚て居
ると思ふのウヌボレ也、先生嘗て、女子螺尻徒町某樓ある或
太夫と夫婦契約した事あり(詐偽とは知れ真にうけて)一夜
其樓にて太夫が別室より再来して、オヤモイ寝ナマシタノ
カエと言ながら横臥になり抱着く機會に、薩芋の程大か

らを納豆の程臭からざる息成雷を蜂聲と取ばづしけるが、上等の太夫がブーッケナ音をさせると云てハ放屁くドリダカラ何とか紛かさんと工夫したガ、名に負手練忽に思ひつき何にも言を唯メッく、と黙哭出したり、卿何を泣のダ、デモ悲くッてなりまへんものを、何が聴てクソナマッ斯して時々来てクソナマスうちハヨウザマスガ妾等の様ナ禮容の悪い者の無程朝夕お陪従と成タラ愛想つかされて放逐されヨウカと臆へばソレガクソソ、く、イソソのこと今のうちにと斷念つて放さんザマス、ナニ屁位放ッテ何の已が愛想つかすモンカ、娼女すましたりと安心、サウザマスカ嬉しいソザマスヨと、身を振るる拍子に元來鶏卵や烏芋れ弾ごめなれば思はず再一發、此回ハ何といひぬけんと流石に思案

に差問たるまゝ唯先例に倣て又メッく、ヨ、く、卿もよッばと疑ぐり深え、モ、一最前ので了解て居るに

○狂句

論より商法てうせんも開港し
鎗ハ突く長刀まはす自然の理
竹の子を親にはらせる茶碗蒸
貸金も足れたかいハ倒れぢぢ
外國ハ貞女重ねぬ小夜ケツト
突合ハ遊びかけそて無尽の氣
撞木町いまハ勤もたふさどけ
川所か、洲の字に寝たる子澤山

シバダ

シバダ

雪 失 琴 柳 雪 多 正 喜
舍 名 吹 袋 舍 貧 喜 耕

○隠語 前号の心並新題

(一)のこころの 悔がない

(二)のこころの 道が明か

(三)のこころの 家事に安心

(一)相摸原の開墾ト 鯨の料理

(二)高島坑トかけて 老人の感冒

(三)佐渡の礦山トかけて 破損鼻輝

先例の通

心の次号へ

○新曲(七言八句)

「まゝにならぬが、世のならひどの
かくこなれども、たまにあふ夜の
せめてその夜の、ひと夜ばかりの
あけぬならひの、世にしてほしや

應或人需

編者稿

○東都逸

不知作者

「お寺のだいこく傘どいちがひ、されて用ちひる御代の恩
「店のねすみぐひもトいまゝ、うかど地獄も身をおとそ
附録 ○月次狂歌三月分の開日當座感吟

玉纏居大人撰

題十二支中甲の六支

松 壽 翁

はゐられておちん命を拾ひつゝまそく
鼠あれ騒く也

全

稻 垣

死よて皮殘さん虎も何かせん尻鞆卷の太刀のそたれて

此欄内の記者の關係せざる所、然れども此歌は初句よつきて響ふト一言口走
りし事ありし縁又一寸お邪を申升、初五文字シテとあるハ常の詞なるを故
テ又、テと音格よ言ハん方宜うらんかと思ふよしハ虎死而留皮ハ韻府群玉
ハ豹死云とわりと云語ハ對ハ漢籍よみくせの響きをうつさん方上下の照應
狂歌の興歎唯其体よりて耳、とちめれテもト上句どかけあはざるのとぞ思ハ
るゝととしてハ如何、序なればおたづね申そ

同乙の六支

古 面 翁

汝^かが耻^{はら}をむくし咄^{ばつし}みかきの種^{たね}むさぼる欲^まい今もやま猿^{ざる}

全

連^{れん}銭^{せん}はわー毛^げも人^{ひと}やおどろるん市^{いち}の賣^{うり}直^{ちか}もはねし荒^あ馬^{うま}

おなトころろを

遠^{とほ}方^{かた}よふしを見つとも女^にうし荷^には塩^{しほ}尻^{しり}を叩^{たた}られて行く

これも

浦 入

あやーきを見てい必^べ吼^こみけり惠^{めぐ}るぬーに恩^{おん}をむくいぬ

正誤○前号初丁ウ第五行隣家^{りんか}の○の○か、末の滑稽考の考^{こう}の稿、同第十二行吞^{のた}れ^りの吞^{のた}れ
三丁オ第三行イワハルハユ、四丁オ第三行詩ノ承句献^{けん}の献^{けん}の誤、五丁ウ第三行とこ
のここの轉倒、六丁オ新聞^{しんぶん}の新聞^{しんぶん}、同ウ第五行語り^{かた}の語り^{かた}、六丁ウ謎^めの中堅固^{ちゆうけんこ}の堅固^{けんこ}
ぎよ作るべき也

風雅新聞第十九號

風船の話

狂歌

滑稽の説

怪化僧の茶談

詩

論語失注

狂歌の説

俳句

皆目話可亂會出品評

どくいの

狂句

謎

附録

滑稽

風雅新聞

毎月五日三次發兌 第二十號

定價錢三厘



意を吐くを聞て

茅場町

賛々亭

開化といひ口さきむかり飾る鯉菖蒲がたなのぬけぬ舊弊

小學のたんど（單語）端午も今も休めどの柏餅よりあまい親父

夕立

盛岡

梅園

西ひがしかけあるきたる草臥も横も寝てふる夕立の雨

遊客

下総花井

赤面亭

たこれ女がはくや草履の音沙汰を獨まつ間も長廊下哉

夏戀

盛岡

千秋堂

夜もなき日もふがれつ一方の蟬もやたるも熄時あるを

逢戀

古面翁

よひ枕をる夜の夢も心して聞のうちへの這入らざる覽

寄瀬戸物戀

琴通舎

思ひと命もいまか散蓮華をくふの君がたつたひと口

悼内閣顧問三位卿之逝去

福芝齋蕪壤

大都の國のしまりもどこのへて朽に木戸の名を遺を覽

滑稽ノ説

香月庵主

滑稽酒器吐酒不已。俳優之人。詞不窮竭。如滑稽之吐酒不已。

云唐人ノ説アレヒ、字面ヲ見テモ器物ノ名トハ思レズ、徂徠

先生ハ、石流ニ大學者程有テ、弁慶ハ滑稽ノ男也、ムサシ坊ト

附タルモ弁ノ字ヲ片假名ニテ讀ナルベシト南留別志ニ云

テアリ、楚詞ニ、滑稽突梯ト云フアリ、弁慶ノムサシ坊モ、トツ

テ一モ付テ話ニテ、中々味アリ、酒器ナド云ハ實ニ唐人ノ嚙語

○小景

牛門外史

新樹連空際。幽林路欲迷。一禽驚起去。啼入碧雲西。

夏夜懷友

同人

殘宵相憶依書幃。杜宇聲々月裏飛。底事天涯爲客久。山禽猶道不如歸。

放蕩和尙

培玉 春雲生

香閣延人鬪碁手。道場徵妓聽嬌歌。投鼻貓兒不甘食。碩鼠福田衣下多。

怪化僧

全 牛後迂仙

梵唄不聞々鄭歌。背佗黃面對青娥。君看王政維新澤。偏向浮圖頂上多。

怪化衲子ガ品坐ノ茗談スルヲ聽ニ甲曰自分バツカリ開化ノ

細君ヲ聘タリ魚肉ヲ噉タリ公然ヤツテモ何分人民ガ不開

化ダカラウケガ惡クツテ擅家ヲ離レルノ何ノ觀音ト聒シク

云ニハ困ル遮莫朱印モ除地モ隱囊ト共ニ上地拂下又近頃

ハ衆人ガ肉食養生ヲシテ健康ニ成テ滅多ニ不死カラ滅罪

ハ不景氣加之大莖院ダノ妾夾淫ダノト入費ハ取レル願己

テ見ルト誥子一寧還俗ト出掛テ商法デモト思テミタガ算

數ハ知ズ帳合ハデキズ乙曰宜哉々々尙商法中デ貴公ニモ

出來ヨ一カト思レルハ土妓樓ダ坊的ハ死ト牛ニ成ト云カ

ラ同苗相憐ノ義デ丙曰己矣々々ソリヤア永續無覺束ダ何

ナラバ甲的ハ土妓モ大好物ニ私有物ト成タラ自分ガ試験

ナサレタ格ニ妓ヲ夢聞ム講ズルト護所持ノ梵婆ガ嫉妬ダ

ラウ且彼梵婆ガ三十年前ニハ活辨天ト化名ヲ取タ的サア

其辨天ヲ兼帶シタ大黒ノ福神ニ瞋恚テ見ナ忽身上ハ願以

此德ダ如何シテソレテ繁昌スルト云フガ三千大千世界ニ

アルモノカ虚言ダト思ナラ一切經ヲ閲藏ゴロンシ

(記者曰ク、ナラウナラ爰ニ一催興ノ文句アリタシ)

○新樹綠滋

龜戸

中村一能

深みどりみ空の色もひとつらよ若葉茂れり天の香具山

祈戀

全

貴船川流れあふ瀬を行氷のたゞひとそぢよ祈る頃うさ

遠近新樹

盛岡

愛

竹

見とさせむ梅津桂のへだてあく同色よぞ若葉さしける

贈岡野令嬢歌

横田正綱

璞の春去往と早蕨のもゆる岡野を名に書そはしき處女
が、其顔の端正に、青柳の細眉根を、咲まがりしちひ榮えて、
未通さびさぶるさうりい、梓弓末の珠名が、古もいりて及

めや、そよ故にえま欲そと、伏屋たきそ、一競て、人皆の
争ひよれど、愛や一岡野處女、世中のみちたき事、聞ま
くの嘗て欲せず、言まくも更と思えず、朝さらす衣裁縫ひ
夕さらす書よみさとり、父君の業をもたせけ、母刀自の手
とさも救ひ、一向勤み居れむ、皇神の御靈助けて、百八十
の齡もかさね、千万の貨もつまじ、空蟬の世の勞よ、然るか
り思なづみて、村肝の心痛むな、愛さ未通女子、

玉詠の褒詞最過たり小女が如き惡敢て當ん雖然長歌を賦するの難き中葉以來よ
く調格をなせる幾許ある而此詠の如き其主意の姑措て其調の高尙あるに更也
首尾貫徹所謂聯疊對句光彩等文をなせるの巧手捨るよ忍びず以て掲ぐ

○論語失註

埶玉

花寄鬪子

久矣哉

西方ノエマ

洋々手盈耳哉

巡查ノ働

富貴在天

無能ノ族

希不失矣

族ノ商法

不可不愼 新聞記者。

吾從衆 人撰ノ投票。

見而知之 娼妓ノ梅毒。

博我以文

未見其止

吾莫隱汝

風雅新聞

竊盜ヤ姦淫

郵便ハガキ

○狂歌の説

和歌間拔書畫向見ず詩鐵炮俳諧天狗狂歌自惚斯口輕又惡口を口號も其口調の蓋口元思案も非る也然而此作者も又狂歌師からずして何ぞや且此三十一字も仍狂歌も非ずして又何ぞや貫之大人の尊べれ一歌の風韻も頓着せず一派狂歌の一節あらんを常念懸たらんよ一歌の間拔のやうも見ゆべし否見ゆと謂んぞ則狂歌の見識なるべき抑狂歌の古の俳諧歌を先祖と一天明の頃別家して出店にも大家が多く漸次得意も蔓延て頗繁昌を極め文政と承ぎ天

折中居中谷

保と移り各自家風を立たるが近年に至り早晚大に衰微れたり斯さびれたる發端の彼自惚と歌ひ一頃既に萌芽せしもの也何となれ心其起因該先祖たる俳諧歌の即俳諧也と雖盡く雅言よして其体の較高尙あるを一變し博くらんを要して字音を弄す俗語を嫌えず聞かざる事見當る物何でも語戯三十一字よ曰れぬなき様新發明して歌てふ事を知ぬ耳をも浪を事かく可咲がらせ歡をせしこれぞ狂歌の功ありける

○俳句

人絶のそれを牡丹の眠りけり
水と雲走り違うてほととぎす
短夜や垣根をたたく湛一沙

豊後日田 佐藤可梁

七十四翁 月の本爲山

竹醉日

竹植^{たけうゑ}も來たりとそれぬ酒^{さけ}の味^{あじ}

全

机^き上^{じやう}にかゝり不圖^{ふと}思^{おも}出^いる事^{こと}ありて

蠅^{はし}飛^とやちげうちもせぬ禿^{かぶ}る筆^{ふで}

全

○皆目話可亂會出品評

腐量^{かぶりやう}劍^{けん} 靈蛇^{りやうぢ}の尾^{しり}うら出^{いで}しに非^{あら}ず愚痴^{おろか}の胸^{むね}から出^いたる銘^{めい}

品^{ひん}也^や或^{ある}ハ姦^{かん}症^{しやう}馬^ば鹿^か耶^やの手^て打^う也^やとも云^い穴^{あな}隙^{げき}を切^きり佗^たの妻^{さい}

妾^{せま}に手^てヲ負^おせ東家^{とうか}の垣^{かき}をふえ其^{その}處^{ところ}女^を又^{また}瑕^{きざ}つけるなどに

用^{もち}ふ時^{とき}として身^みから銹^{さび}を生^{しょう}ずるあり

比^ひ度^ど具^ぐ面^{めん} 賃^{そん}直^{りやう}物^{ぶつ}を行^{しやう}質^{ちやう}く時^{とき}かど一^{ひと}皮^{かわ}かぶる或^{ある}ハ七^{しち}所^{ところ}借^{かり}

ををる時^{とき}ハ非^ひ常^{じやう}に莞^{わん}爾^に一^{ひと}斷^{ことわり}を受^うけ時^{とき}ハ忽^{たち}然^ま面^{めん}色^{しよく}を變^{へん}ず

是^{たれ}妄^{みだり}甚^{じん}五^ご郎^{らう}ガ巧^{こう}作^{さく}されバあり 右^{みぎ}二^に種^{しゆ}出^{しゆ}品^{ひん}人^{にん}培^{つち}玉^{たま}灑^{せい}落^{らく}齋^{さい}

○どど一

いろは沓^{くわ}冠^{かん}のつゝき

開^{ひら}知^ち軒^{けん}

ゆ^ゆうれいあんのの嘶^はもきえて開^{ひら}けぬむらゝの夢^{ゆめ}のさめ

全

茅^{ちやう}場^{ばう}丁^{てい}

湖^{うみ}山^{さん}

「みちでない事^{こと}知^しつてハ店^{みせ}れど今^{いま}さら切^きられぬ好^{この}まどし

五十音字^{ごじゅうおんじ}もりあみ

鹹^{しん}齋^{さい}

「父^{ちち}字^じ母^{はは}字^じのそゝめるえんもやつとへんトをあい^あいうえお

「牙^{きば}うりもんでも音^{おと}信^{しん}されぬ此^こ方^あうら手^て紙^{あみ}をかき^かくけこ

「齒^はるかよきこゆる三^{さん}線^{せん}の音^{おと}に起^{おこ}てさうづきさしそせそ

○狂句

無^む税^{ぜい}とて心^{こゝろ}ゆるをち口^{くち}ぐるま

雪^{ゆき}山^{さん}

飯^い盛^{もり}へ客^{きやく}そつと出^いで三^{さん}むい目^め

茂^{しげ}

家風かふうの堅かたく和やはらかぢ人ひとづうひ
無口むくちで勤つとめよ怠おこたらぬ寒かん暖たん計けい

正喜
雪舍

○隠語かかご 前号まへごうの心並こころなみ新題しんたい

- (一)のこゝろのころ 原はらを開ひらいて水利すゐりをなそ
- (二)のこゝろのころ 石炭せきたんが出でる
- (三)のこゝろのころ 坑あから金きんが出でる
- (一)妹いも春山はるやまの雛鳥ひなどりト掛かけて 岸近きしぢかの難船かんなせん (例ノ通り 心ノ次号へ)
- (二)盲人もろうじんの角力かくりきトかけて 魚うをもやる餌え
- (三)寄席よせの口上くちやうトかけて 地球ちきうの直徑ちきう

有無軒うむげん一口出題いっこうだいてい

附錄ふろく ○月次狂歌げつじきやうか五月分ごがつぶん

竹芝たけしば 兼題かねだい 橋上時鳥はしの上の時鳥 雨中遊興うらみちのゆうきう
琴通舍かみどろしや 大人判おとなのひら 兼題かねだい 橋上時鳥はしの上の時鳥 雨中遊興うらみちのゆうきう
岩上亭いわの上のてい

